

## ラテンアメリカのアヴァンギャルド

ヴィッキー・ウンルー  
崎山政毅 訳

## 序論——生と芸術との波乱にみちた出会い

ラテンアメリカの新たな物語の正典のひとつである、フリオ・コルタサル Julio Cortázar の小説『石蹴り遊び *Rayuela*』(一九六三年)のなかで、主人公のオラシオ・オリベイラは、彼が追求している実存的洞察と形而上的統一性へいたる道としてのさまざまなゲームをでっち上げている。そのなかでも飛び抜けた気晴らしになっている二つのゲームは、言語にかかわっている。オラシオとその友人たちは、「墓地」から——これは彼らが王立アカデミー版スペイン語辞典につけた愛称なのだが——隠れた言葉を掘り出すのである。彼と彼の恋人ラ・マーガは、彼女の発明になる言葉であるグリグリコ語 *glíglíco* でこっそりと会話をかわすのだが、この小説の「使い捨て可能な章」にはこの謎めいた言語の実例がいくつも含まれている。同様の調子[傾向]で、チリのホルヘ・ディアス Jorge Díaz による一九七〇年の実験戯曲『ラ・オルガーストゥラ *La orgástula*』では、スペイン語の語形論と統語法にしたがっているがそれ以外は理解不可能な言語で意見をつたえあう、全身をガーゼにつつまれた二人の人物が登場する。

オラシオ・オリベイラの墓地ゲームにそなわった言語的戦略、反アカデミー的な精神、そして暗黙裡の社会批判は、一九二〇年代から一九三〇年代初頭にかけてラテンアメリカ全域で興隆した文学アヴァンギャルド運動にその根をもっている。『ラ・オルガーストゥラ』やコルタサルのグリグリコ語に典型的にみられる難解な造語表現は、初期アヴァンギャルド詩人たちの言葉遊びにおいてラテンアメリカ文学へのデビューをはたした。それはとりわけ、ビセンテ・ウイドブロ Vicente Huidobro の主要な詩作『アルタソール *Altazor*』での言葉のアクロバットや、彼の一九三四年の戯曲『月光の中で(うわのそら) *En la luna*』に出てくる政治的に操作された傀儡たちのレトリカルなポーズに顕著にあらわれている。じっさい、現代ラテンアメリカ文学のさまざまな新機軸のアヴァンギャルドでの先行例には事欠かない。マヌエル・プイグ Manuel Puig やルイス・ラファエル・サンチェス Luis Rafael Sánchez の小説、もしくはマルコ・アントニオ・デラパラ Marco Antonio de la Parra のポストモダン演劇実践において登場した、高等芸術と民衆文化あるいは大衆文化のあいだの種々の対比は、ロベルト・アルルト Roberto Arlt の二〇年代末・三〇年代初頭の小説や戯曲によって、オズヴァルド・ジ・アンドラーヂ Oswald de Andrade が一九二〇年代におこなった複数の物語のコラージュによって、先取りされているのである。アレホ・カルペンティエール Alejo Carpentier の『失われた足跡 *Los pasos perdidos*』(一九五三年)、ホセ・マリア・アルゲダス José María Arguedas、エレナ・ガーロ Elena Garro、ロサリオ・カステジャーノス Rosario Castellanos による一九五〇年代・六〇年代のインディヘニスモ散文小説、そしてマリオ・バルガス＝リョサ Mario Vargas Llosa の『密林の語り部 *El hablador*』において取り組みがなされた、近代性と土着

的なるものとの文学的遭遇は、数十年も前にマリオ・ジ・アンドラーヂ Mário de Andrade の『マクナイーマ *Macunaíma*』(一九二八年)、ミゲル・アンヘル・アストゥリアス Miguel Ángel Asturias の『グアテマラ伝説集 *Leyendas de Guatemala*』(一九三〇年)やカルペンティエール自身の初期散文小説やパフォーマンス実験作品で着手されたものであった。フアン・ルルフォ Juan Rulfo の『ペドロ・パラモ *Pedro Páramo*』(一九五五年)、カルロス・フエンテス Carlos Fuentes の『アルテミオ・クルスの死 *La muerte de Artemio Cruz*』や『アウラ *Aura*』(双方とも一九六二年刊)、ギジェルモ・カブレラ＝インファンテ Guillermo Cabrera Infante の『三頭の悲しき虎 *Tres Tristes Tigres*』(一九六七年)、オスマン・リンス Osman Lins の『観音 *Avalovara*』(一九七三年)、あるいはルイサ・バレンスエラ Luisa Valenzuela の『武器の交換 *Cambio de armas*』(一九八二年)といった作品がここらみた語り<sup>ナラティヴ</sup>の主体のあり方につきつけた異議は、マルティン・アダン Martín Adán の一九二八年の散文実験作『段ボールの家 *La casa de cartón*』によって予示されている。カルロス・オケンドー＝デ＝アマ Carlos Oquendo de Amat によるタイポグラフィをもちいた型破りの作品『いくつかの詩からなる五メートル *5 metros de poemas*』は、一枚の広げられたシートに印刷されたものだが、オクタビオ・パスの『白紙 *Blanco*』に先んじている。さらに、ホセ・トリアナ José Triana、エミリオ・カルバジート Emilio Carballito、グリセルダ・ガンバロ Griselda Gambaro、そしてとりわけディアスのような現代の脚本家たちと結びつけられている、伝統的観衆<sup>スペクテーター</sup>の役割に対するさまざまなメタ演劇的挑戦は、ハビエル・ビジャウルティア Xavier Villaurrutia、ウイドブロ、オズヴァルド・ジ・アンドラーヂ、アルルトによって一九二〇年代末から一九三〇年代に書かれた実験的な演劇実践ですでに取り組みられていたのである。

この間の研究状況は、両大戦間期のさまざまなラテンアメリカ・アヴァンギャルド運動による、現代ラテンアメリカ文学のきわだった成功に対する歴史的重要性を認めてきている。しかし、現代ラテンアメリカ文学自体がもっているアヴァンギャルド的平行関係とその前例、つまりアヴァンギャルドとの類似関係や同様の実践の先行者を、いささか列挙してみせたことは、ラテンアメリカ・アヴァンギャルド運動にかんする限定的で歪んだ見方を与えるものなのだ。というのも、ラテンアメリカの二〇世紀初頭のアヴァンギャルド作家たちは、精選された主要著作や個々の著者の業績によって理解されるのではなく、むしろ芸術の本性と目的とに挑戦しそれらを再定義するための種々の創造に向けた努力やイヴェントや模索作業において表明される、多面的な文化活動として理解されるのが関の山だろうから。アンドレ・ブルトン André Breton 自身は、パリでのシュルレアリスムを一個の活動形態として特徴づけ、ペーター・ビュルガー Peter Bürger、レナート・ポッジョーリ Renato Poggioli、マテイ・カリネスク Matei Carinescu、ロザリンド・クラウス Rosalind Krauss、マージョリー・パーロフ Marjorie Perloff、そしてジェームズ・クリフォード James Clifford といった理論家・研究者も同じく、第一次大戦前後の国際的なアヴァンギャルド諸運動——ビュルガーの用語では「歴史的」アヴァンギャルド——を、広い範囲にわたる現象を含み込む、あるタイプの活動としてアプローチしている。広範な現象とはつまり、多様なジャンルでの芸術的実験、論争、宣言、そして公開のイヴェントやパフォーマンスなどである。

一九一〇年代後半から一九三〇年代半ばにかけて、アヴァンギャルドの活動はラテンアメリカの全域で興った<sup>1)</sup> この活動には次のようないくつかの可能な形式が含まれていた。刷新にかかわる作家たちの小集団の勃興。ある特定の「イズム」によって、あるいはより広く新芸術 *arte nuevo* や前衛派 *vanguardismo* としてしばしば呼称される美的ポジションや文化的ポジションにたつ諸グルー

プもしくは諸個人の主張。書かれた宣言や公開の言明活動をつうじたこれらのポジションの宣伝普及。いくつかのグループによる他のグループとの討論や論争への関与。複合的な文学および芸術のジャンルでの一般的な境界をまたぎこす表現実験。芸術的実験と文化的討論の双方の発表の場としての、しばしば短命に終わった小雑誌の発行。研究グループあるいは研究セミナーの組織化。それらのグループあるいは作家個人による言語・民俗・文化史の真摯な攻究。こうした諸活動はまちがいなく、ピセンテ・ウイドブロ、ホルヘ・ルイス・ボルヘス Jorge Luis Borges、アレホ・カルペンティエール、オズヴァルド・ジ・アンドラーヂ、セサル・バジェホ César Vallejo、エバリスト・リベラ＝シュヴルモン Evaristo Ribera Chevremont、そしてミゲル・アンヘル・アストゥリアスのような、大陸同士を結びつけるリンクの役をはたしている重要人物の姿をともしないながら、第一次大戦前後のヨーロッパ・アヴァンギャルドから幾分かの刺激を受けていた。だがしかし、ラテンアメリカのアヴァンギャルドはこの大陸自身の文化的関心事に起因したものであり、それらの関心事に呼応したのである。これらの多彩な活動のほかには、ラテンアメリカにおける芸術と文化をめぐる思考様式の真剣な批判審問が生じた。もっとも広範な水準で本書の五つの章がその審問の本質を検証している。とくに、芸術と経験との相互作用を問いたす変りつつある考え方を見分けるために、あらゆるジャンルの宣言と創造的なテキストを分析している。芸術と経験の相互作用とは、文学活動の目的と芸術家の変化しつつある役割についてであり、観客や読者にもとめられる新たな役割であり、ラテンアメリカの文化的・言語的アイデンティティにかかわる美についての新たな思想と永く保たれてきた関心とのあいだの結合状態についてのものなのである。

### アヴァンギャルド作家たちの文脈と特性

ある程度共通の特性をみせている実験的なテキスト群のたんなる集成としてではなく、活動の一形式としてラテンアメリカのアヴァンギャルドをとらえる私のアプローチは、アヴァンギャルド表現者たち自身がしばしば芸術と知的生活を、行動あるいは実行として概念化したという事実を強調するものになっている。この文学的作業の多くを特徴づけた浸透性をそなえた活動家の精神は、アヴァンギャルド表現者たちが登場してきた歴史的な文脈にふさわしかった。アヴァンギャルドの諸運動の文脈にかんするきめ細やかな分析者のひとりであるネルソン・オソリオは、当時の寡頭政治に反対する時代精神への注意を、すなわち歴史記録によって支持されている観察をうながしている (MPP xxvi)。一九一〇年代後半から一九三〇年代初頭にかけての年月は、経済的・社会的・政治的諸条件の移り変わりにともなう乗り換えにみちた同盟関係を明らかに示している波乱にみちた出会いの一時代をつくりあげたのだった。ラテンアメリカの諸国民・民族は、第一次大戦期の経済的変容のインパクトを、ロシア革命と国際労働運動がもたらしたさまざまな政治的希望のインパクトを、そして大戦後にオスヴァルト・シュペングラー Oswald Spengler の『西洋の没落 *Der Untergang des Abendlandes*』(一九一八～二二年) に典型的に描かれたヨーロッパ文化に対する広く蔓延した幻滅のインパクトを経験したのである。ある国と他の国とは異なるそれぞれ固有の状況があったにせよ、共通した一定の特徴が総体としてのラテンアメリカ大陸における生を性格づけたのだった<sup>2)</sup>。

経済的には、この時期は輸出入成長モデル (Skidmore & Smith, 1989) と「新植民地主義協定」(Halperin Donghi, 1975) の確立によってかたどられた。文学アヴァンギャルドが活躍した年月には、

一種類か2種類の輸出品への当該地域に特殊な従属状態とその結果生じた世界市場と金融機関へのラテンアメリカ経済の連動に基盤をおいた、急速な成長がますます強まっていく事態が刻印されている。これらの展開には、ラテンアメリカの経済的——そしてしばしば政治的な——問題にかんして、ヨーロッパからアメリカ合衆国へとヘゲモニーが徐々に移っていく事態がともなった。経済の拡大と人口の変動は、ボゴタ、ハバナ、リマ、メキシコ・シティ、モンテビデオ、サンティアゴ、サン・パウロ、そしてもっとも劇的であったブエノス・アイレスを含む主要都市の成長を刺激した。これらの都市の多くは同時に、消費財生産および輸出入経済を維持するために必要なインフラストラクチュア形成とむすびついた限定的な工業部門の伸長の場も提供したのだった。こうした大都市の成長は、都市セクターと農村セクターとのあいだの不均衡と緊張関係を激化させた。農村部人口の大部分は、主流を占める国民的経済生活の周辺にあって生存レベルではたらし続け、外部の投資家によって管理された単一輸出品経済がうみだした経済的上下関係に対して無防備であった。

これらの人口学的条件によってかたどられた政治的な変化には、より政治的に抜け目がなく活動的な中産階級の増大とさまざまな重要な労働運動の発展が含まれていた。アルゼンチンとブラジルにおいて、そしてより低い度合いではチリとペルーにおいて、ヨーロッパからの移民が労働者階級の増大の一因となった。その一方でメキシコとカリブ地域諸国では、先住民、メスティーソ、さらに奴隷の末裔たちが安価な労働力の源泉として使われ続けていた。一九一〇年代半ばから一九二〇年代末にかけて、アルゼンチン、ブラジル、チリ、キューバ、ペルー、メキシコ、ウルグアイそしてエクアドルにおいて、さらにさまざまな度合いでは他の諸国にあって同様に、労働者グループがデモやゼネストを、すなわち大抵のところ当局からの抑圧的な対応を引き起こす諸活動を組織した。アンデス地域とりわけエクアドルとペルーでは、周期的な先住民族反乱が階級的・文化的対峙状況をもたらす雰囲気をもっとも険悪に変えた。ブエノス・アイレスやサン・パウロのような大規模な移民人口を抱える都市での排外的な反応もまた付随的な緊張関係をうみだした。そしてメキシコにおいて、都市に基盤を置いたりペララルな改革への圧力は、より広範な基盤をもった農民反乱と結びつき、ラテンアメリカ大陸でもっとも重大な争乱にみちた新時代の出会い、すなわちメキシコ革命をうみだしたのである。

ラテンアメリカ史上はじめてのこの改革期のさなかに、多くのアヴァンギャルド作家たちを登場させた中産階級は、相矛盾する引力を経験した。みずからの権力の強化をもくろむ伝統的寡頭支配層との相互作用は、政治参加をおしひろげ（いくつかの国ではその他の諸国よりもはるかに参加がひろがった）、政党の数と影響力の増大、参政権の拡張（この時点ではまだ女性に対してはめざましいものではないにせよ）、そして政府が後援する教育改革・社会改革へと道を拓いた<sup>3)</sup>。変革をもとめる活動家の圧力は、多くの場合に政治的に関与する軍部によってひどく処断されたが、キューバのヘラルド・マチャード Gerardo Machado、ベネズエラのファン・ビセンテ・ゴメス、グアテマラのマヌエル・エストラーダ・カブレラ Manuel Estrada Cabrera らの権威主義体制や、ペルーでの十一年におよんだアウグスト・B・レギーア Augusto B. Leguía の改革派独裁のもとにあってもなお、強まっていった。この一層の政治化をとげた当時の中産階級は、その注意を社会的不平等に向けた。さらにラディカルな展開には、ラテンアメリカ初の社会党・共産党（それらのいくつかは何年も後になるまで公的に認められはしなかったのだが）の結成と、この大陸で最初の重要なマルクス主義思想家であるペルーのホセ・カルロス・マリアテギ José Carlos Mariátegui の登場が含まれていた。マリアテギはまた、ペルーでのアヴァンギャルド活動の積極的な推進者でもあり、国際的な文学アヴァンギャ

ルドについての学識豊かな分析者だった。歴史研究者たちはラテンアメリカ大陸での大学改革を、中産階級の政治的覚醒の主要な構成要素のひとつとしてみなしている。この活動は一九一八年にアルゼンチンのコルドバで具体化し、諸国のそして国際的な学生の集会在メキシコ、チリ、パナマ、ペルー、ブラジル、キューバ、ウルグアイ、コロンビア、そしてプエルト・リコがそれにつづいた。そのほかに、結成なったばかりのAPRA（アメリカ革命人民同盟 *Alianza Popular Revolucionaria Americana*）運動の創設者ビクトル・ラウル・アヤ＝デ＝ラ＝トーレ Victor Raúl Haya de la Torre が、ラテンアメリカ全体と諸外国を広く旅してまわり、彼とその支持者たちは、大学改革の諸会議のさいにはじまった政治的・知的接触を強化した。このネットワークは、知的・政治的討論をつうじて多くのアヴァンギャルド雑誌に、そしてある国の社会運動の活動家から他国の活動家へと拡大された支援にかんする、さまざまな編集者の表現のなかに記録されている。

オソリオによれば、大学改革運動は教え方をめぐる直接的関心事を超えて、「民衆の利害、国民の要求、そして社会の変容と調和する文化と教育の新しい概念」を探究するにいたった（*MPP* xxvi）。オソリオにとっては、それに加えて、この運動は政治的・経済的文脈をもった寡頭に反対する政治的精神と文学アヴァンギャルドの作業との直接的な結び目を提供するものである。しかしながら、美的・政治的な変革の要請が有する「共通の性格」について同意しないわけではないが、一九一〇年代末および一九二〇年代にラテンアメリカの街頭で長々と繰り広げられた政治的な対峙状況と階級闘争と、対決を告げる種々の宣言、実験的で創造力あるさまざまなテキスト、そして魅力あるパフォーマンスの諸イベントをつうじて文学アヴァンギャルド表現者たちによって挑発された観客、読者、そして表現者相互の波乱にみちた出会いとのあいだの、あまりに記録の文言どおりの結合をさがすことに懸命にならないよう、気をつけておきたいと思う。

十九世紀初頭以来、国際的なアヴァンギャルドはつねに文化的なるものと政治的なるもののあいだの緊張関係と相関関係を体現してきた。マテイ・カリネスクは、アヴァンギャルドのヨーロッパ的概念におけるそれら二つのもののあいだの歴史的な交差点と分岐点を注意深くなぞり検証している<sup>4)</sup>。ラテンアメリカにおいては、グロリア・ビデーラ Gloria Videla が述べているように、政治的前衛と芸術的前衛のあいだに横たわる諸線を鮮明に描くことができるのは稀である<sup>5)</sup>。だが、当時の政治的かつ美的なアクティヴィズムは、しばしば絡まりあいながらも、互いの姿を整然と映し出しもしないものである。たしかに多くのアヴァンギャルド芸術家やアヴァンギャルド・グループは、何らかの時点で、芸術におけるのと同じく政治における波乱にみちた出会いにわざわざ関わりをもった。たとえばキューバのミノリスタ・グループ Grupo Minorista は、そのメンバーにアヴァンギャルド雑誌の『進歩評論 *Revista de Avance*』（一九二七～三〇年）の創刊者たちも含んでいたが、キューバにおける社会的・政治的変革の広範なプログラムを支持し、キューバ、メキシコ、ニカラグアの問題へのアメリカ合衆国の関与に抗議し、ヘラルド・マチャードの弾圧施策に積極的に反対した。ひとりの学生活動家としてミゲル・アンヘル・アストゥリアスは、グアテマラの独裁者エストラダ・カブレラに抗してはたらき、民衆的教育改革運動に参加した。その晩年のアヴァンギャルド作家時代に、チリのビセンテ・ウイドプロとブラジルのオズヴァルド・ジ・アンドラーヂは二人とも共産党に加わった。ペルーの中心的なアヴァンギャルド雑誌の『アマウタ *Amauta*』は、労働者擁護の立場を理由にレギーア体制によって六ヶ月間発行を禁止され、警察は、同誌の編集者マリアテギを一時的に勾留したが、すでに述べたように彼はペルー社会主義の創始者たるマルクス主義者でもあった。プエルト・リコの監視派の人びと *atalayistas*、とくに詩人のクレメンテ・ソト・ベレス

Clemente Soto Vélaz は、ペドロ・アルビス・カンポス Pedro Albizu Campos によって広められた初期のプエルト・リコのナショナリズムと分離独立主義を支持した。メキシコのエストリデンティスモの表現者たち *estridentistas* は、メキシコ革命のなかに体现された反逆精神を見習えと自国の知識人に要求し、メキシコの「同時代人 Contemporáneos」グループの何人かのメンバーは、グループ形成以前に、[ときの教育省書記(大臣)]ホセ・バスコンセロス José Vasconcelos が取り組んだ教育改革を支持していた。アヴァンギャルド表現者たち *vanguardistas* の政治的アクティヴィズムは、進歩的あるいは左翼的なものにもみ限定されない主義主張によって特色づけられていた。たとえばニカラグアのアヴァンギャルド作家の一部は、アメリカ合衆国の中米への介入に対するアウグスト・セサル・サンディーノ Augusto César Sandino の抵抗を支持するとともに、父アナスタシオ・ソモサ Anastasio Somoza[サンディーノを暗殺し、自分の一族で親米独裁政権を樹立した]の反動的ナショナリズムも支持したのである。ブラジルの「愛国(緑・黄 Verde-Amarelo)」<sup>〔訳注〕</sup>グループの領袖たちは、芸術家としてある種の神秘的ウルトラ・ナショナリズムを是としていたが、後にファシスト的な「ブラジル統一主義者党」を結成した。

だがしかし、この後の数章で解明を試みている波乱にみちた出会いは、文化と芸術の領野において展開する。政治的・文化的アクティヴィズムの「共通の性格」は、アヴァンギャルド作家たち(きわめて非政治的だったものもいた)の具体的な政治的行為にのみ見出されるべきものでも、彼らがおこなった種々の芸術的実験のもつ明示的な社会的内容に見出されるべきものでもない。いくつかのアヴァンギャルドの創造的テキストは実際に特定の社会条件のあからさまな批判をわざわざ組み込んでいる。だが、総じてアヴァンギャルドの美的アクティヴィズムは文学的リアリズムの信奉者による暴露記事とはまったく種類を異にするものなのだ。『アヴァンギャルドの理論』でのペーター・ビュルガー Peter Bürger にとっては、ヨーロッパの歴史的アヴァンギャルドのもっともラディカルな特徴は、ブルジョア社会の一機構として芸術がはたす役割を攻撃したことであった。彼が主張するには、こうしたヨーロッパ・アヴァンギャルドの諸運動の内部にあっては「社会的部分システム〈芸術〉は自己批判の段階に入る」(Bürger 1984[1974]:22, 邦訳 34 ページ)のである。ビュルガーはここで機構という語をもちいているが、それは芸術にとって一個の「生産し分配する機構」のみならず「ある所与の時代において支配的な——作品受容のあり方を本質的に規定する——芸術観」をも指している(同上)。ラテンアメリカのアヴァンギャルドに、通常ヨーロッパのダダと結びつけられる絶対的な反芸術のスタンスはほとんど見出されない。文学的伝統の制度化は、ラテンアメリカの文化生活では相対的に近年の現象だったし、いくつかの場合、アヴァンギャルド運動そのものが国民文学あるいは国民的正典となる作品の構築にからめとられてしまったのである(6)。しかしラテンアメリカのアヴァンギャルド表現者たちは彼らの時代に優勢となった芸術についてのさまざまな思想に深くかかわっており、表面上ははっきりと非政治的な見解をとっているときでさえ、芸術の生産をとりまいている問題含みの社会的・文化的文脈のなかで芸術のはたしうる役割を真剣にたしかめたのだった。彼らは自分たち自身の芸術活動がもつ価値に対して批評眼をむけたとき、活動家の知的生活に欠かせない一部として芸術をしばしば想定した。美的アクティヴィズムは、文化の現場に針のように突き刺さるアヴァンギャルド芸術家たちのプレゼンスにおいて、さまざまな伝達様式(宣言、大判広告紙、文学論争、対決姿勢をあらわにした文学的調査、公開パフォーマンスの興行)への参入において、あるいは新たな読者からの反応を要請する困難な文学的実験において、はっきりと示されたのである。

## アヴァンギャルド活動の（再）読解

本書では個々の並外れたテキストの一群としてよりもむしろ、活動の一形態としてアヴァンギャルドにアプローチしているために、批判するための努力と創造に向けた努力のあいだ、すなわちさまざまな宣言あるいはその同類の文書と創造的なテキスト群のあいだでの暗黙裡の対話を検討することがしばしばある。多くの文学テキストの精密な読解をきちんと提示してはいるものの、その基礎をなす前提にあるのは、短命に終わったアヴァンギャルド定期刊行物に掲載されている短い宣言や文学的概説が、批判的に称賛をうけた創造的作品と同様に、芸術についての思想と文化についての思想の対話にみられる一ファクターを重要なものとして構成しようということである。私自身のアプローチが近年の他の学的成果によって形作られてきたことには疑いを容れる余地はない。ラテンアメリカのアヴァンギャルドが、この大陸の文学史の重要な構成要素として認識されるやいなや、さまざまな研究者が特定の国やグループ、雑誌あるいは主要な作家たちについての個別研究に取りかかった。同時に初期の研究は主として詩に焦点をしばった。こうした類の重要な取り組みはつづいているが、この十年に見られたのは、アヴァンギャルド活動の多面的な質を認識し総体的に二つの研究の方向性を追求する、より包括的な再評価である。

第一の研究の方向性は、大陸全体をとらえる基盤にたって当該期を歴史的・書誌学的に再構成することを追求し、4つの主要なアヴァンギャルド関連資料のアンソロジーおよび一冊の本の長さにおよぶ文献目録を生むにいたった。その4つのアンソロジーおよび一冊の文献目録とは、ウーゴ・ヴェラーニ Hugo Verani の『イスパノアメリカの文学アヴァンギャルド：宣言・布告・その他の文書 *Las vanguardias literarias en Hispanoamérica: Manifiestos, proclamas y otros escritos*』（一九八六年）、ネルソン・オソリオの『イスパノアメリカ文学アヴァンギャルドの宣言・布告・論争 *Manifiestos, proclamas y polémicas de la vanguardia literaria hispanoamericana*』（一九八八年）、グロリア・ビデーラの『イスパノアメリカ・アヴァンギャルド便覧 *Direcciones del vanguardismo hispanoamericano*』（一九九〇年）の第二巻（『資料編 *Documentos*』）、ジョルジュ・シュヴァルツ Jorge Schwartz の『ラテンアメリカ・アヴァンギャルド：綱領的テキストと批評テキスト *Las vanguardias latinoamericanas: Textos programáticos y críticos*』（一九九一年）、マーリン・H・フォースター Merlin H. Forster と K・デイヴィッド・ジャクソン K. David Jackson の編んだ『ラテンアメリカ文学のアヴァンギャルド：注記つき文献ガイド *Vanguardism in Latin American Literature: An Annotated Bibliographical Guide*』（一九九〇年）である。これらのうち最後の二つには編者の広い射程にブラジルもおさめられている。アンソロジーの書名は、整然とした分類におさまらないさまざまな資料がそなえる折衷的な本質をはっきり表しており、そのために「その他の文書」「資料」あるいは「綱領的テキスト」といった表現になっているのである。フォースターとジャクソンの文献表も、アヴァンギャルドの展開期の一次資料に雑誌、創作作品にくわえ、いわく言いがたい「その他の資料」が含まれているために、明確さを旨とする分類に対する同様の抵抗を示している。分類にかんするこれらの問題点は、権威ある著者や作品の一群としてというよりもむしろ活動の一形式としてのアヴァンギャルドという考え方を補強するものである。また、その成り立ちそのもののなかに、これらの資料集成が示唆しているのは、ラテンアメリカにおけるアヴァンギャルドの時代の有意義な理解に達するためには、特定の個別作品、作家あるいは個々のジャンルさえも超え出て研究を進めなければならないということなのだ。

それと同じ前提が、近年のアヴァンギャルド研究、つまりヨーロッパ・アヴァンギャルドに関連しているがヨーロッパとは異なるものとしてのラテンアメリカのアヴァンギャルドについての包括的な特徴づけの模索における探究の第二の方向性にも現れている。この第二の研究の方向性は、ラテンアメリカ・アヴァンギャルドが実のところ何に似ていたのか、あるいは本当は何についてのものだったのかをより広範に定義し、そうした定義にいたるためにはどのような類のアプローチが適しているのかを精密に計画だてることを目した、さまざまな研究論文を生み出してきている。フォースターの一九七五年の論文「ラテンアメリカのアヴァンギャルド：年譜と用語“Latin American Vanguardismo: Chronology and Terminology”」はこの方向性における根本的な手法をつくりあげ、また彼の「ラテンアメリカ・アヴァンギャルドの総合把握にむけて“Toward a Synthesis of Latin American Vanguardism”」（一九九〇年）はファースター＝ジャクソンの文献表の序論を構成しながら、この研究の方向性を拡張している。このタイプの基本的な論文には他に以下のものがある。オソリオの「イスマノアメリカ文学アヴァンギャルドの歴史的特徴づけのために“Para una caracterización histórica del vanguardismo literario hispanoamericano”」（一九八一年、ただしオソリオの宣言アンソロジーの序論に再録されている）、アロルド・デ・カンボスの「食人的理性をめぐって：貪欲の徴にいたるヨーロッパ“Da razão antropofágica: A Europa sob o signo da devoração”」（一九八一年）、クラウス・ミュラー・ベルク Klaus Müller-Bergh の「人間とテクネー：イスマノアメリカ・アヴァンギャルド諸潮流の認識への寄与“El hombre y la técnica: Contribución al conocimiento de corrientes vanguardistas hispanoamericanas”」（一九八二年、第二ヴァージョンは一九八七年）、サウル・ユルキエヴィッチ Saúl Yurkievich の「アヴァンギャルドの有為転変“Los avatares de la vanguardia”」（一九八二年）、ジョルジュ・シュヴァルツの「ラテンアメリカにおけるアヴァンギャルド：比較美学」（一九八三年）と彼のアンソロジーの序文（一九九一年）、ウーゴ・ヴェラーニのアヴァンギャルド資料アンソロジーの序論、さらにグロリア・ビデーラの一九九〇年のアンソロジーの序文<sup>7)</sup>。

この資料のほとんどが、私自身の研究の基礎をなしている次のような一定の前提を共有している。

①ラテンアメリカ・アヴァンギャルドは大陸全体で展開をとげたものであり、それゆえ比較のうえで究明がされなければならない。②アヴァンギャルド表現者たちは詩に対してと同様に、散文小説や戯曲に重要な変化をもたらし、じっさい、たびたび一般的な種々の分野に挑戦した。③宣言および宣言風テキストは、アヴァンギャルドによる批判と創造の表現の主たる発表の場をつくりあげていた。④ラテンアメリカのアヴァンギャルド総体は、芸術家たちがみずからの文化的切迫性をもちながらヨーロッパ・アヴァンギャルドの諸潮流と交流をおこなったために、その指向性において国際的であると同時に土着的であった。この傾向にそった私自身の研究は、各国別研究やジャンル研究とは異なって、スペイン語圏アメリカおよびブラジルのあらゆるジャンルの批判的・創造的なテキストの精密な読解にもとづいており、ときにきわめて多様な大陸全体に広がる運動や活動のあいだで、それらがラテンアメリカの芸術と文化について提起しているさまざまな思想において、共通基盤をうちたてることをめざしている。同時に、活動の一形式としてのアヴァンギャルドという定義を保持しつつ、本書の五章のうち四つで、何らかの芸術的ポジションを肯定する宣言あるいは批評論文と、そうしたポジションをより打ち固めもし掘り崩しもする実験的な創作表現とのあいだの、複雑な相互作用を検証していく。特定の作品や検討をくわえられた批判文書の選択基準もまた、一個の文化的活動としてのアヴァンギャルドという規定を反映している。それゆえ本書が目的



としているのは、アヴァンギャルドの正典を確定することではなく、とりあつかわれている芸術的・文化的諸問題に直接関係のある多数の主要な表現者たちの作品を検証してはいても、すぐれた個々の作家たち自体に焦点をしぼることでもない。それよりも本書では、さまざまな考え方をめぐるアヴァンギャルドの複雑でしばしば矛盾に満ちた対話がおこなわれる在り方を介して、諸資料の広範で折衷的な射程を切り拓いている。それらの章は、ラテンアメリカにおけるアヴァンギャルド活動の歴史的究明という、先に述べた成果の一部ですではたされているプロジェクトに取り組んでいるわけではない。最後に、ラテンアメリカのさまざまなアヴァンギャルドを歴史的・文化的に特有な展開の結果として強調してはいるが、国際的な諸アヴァンギャルドと種々の思想のレベルでの相互作用とを適宜関連づけてもいる。本書は各国研究でもジャンル研究でもないが、この領域での重要な近年の成果でも、文化活動の一形態としてアヴァンギャルドがとりあつかわれてきている。とくにそれらの研究成果のうち二つのものが私自身のアプローチにインパクトを与えている。それはフランシーン・マシエロ Francine Masiello のアルゼンチンにおけるアヴァンギャルドについての著作『言語とイデオロギー：アルゼンチンのアヴァンギャルド諸潮流 *Lenguaje e ideología: Las escuelas argentinas de vanguardia*』（一九八六年）は、複数のジャンルにわたるアプローチを採用し、創造的な作品を生み出すための特有な批判的思潮の構築にさいして宣言がはたす役割を検討している。スペインとスペイン語圏アメリカの両方が含まれているが、グスタボ・ペレス＝フィルム Gustavo Pérez Firmat による革新的なスペイン語アヴァンギャルド小説の研究書『だらしのないフィクション *Idle Fictions*』（一九八二年）では、散文小説の諸作品とそれらの同時代における批判的受容の相互関係を論じられている。

### 共通基盤上での地域的差異

ラテンアメリカのアヴァンギャルドが大陸全体におよぶ現象であったという前提は、以下の各章への出発点を提供するものである。アヴァンギャルド活動はじっさい、その場その場に特異な癖をはっきりと見せつける、いろいろな国や地域の運動を含み込んでいた。しかしながら、フォースターが主張しているように、ラテンアメリカのアヴァンギャルド表現者も、自分たちがひとつの「共通の企て」に参加しているということを知っていたのである（『ラテンアメリカ文学のアヴァンギャルド』8ページ）。じじつ、さまざまな小雑誌やアヴァンギャルドの文書にかんするきわめて不手際な検討でさえ、雑誌や創作の交換の大陸的なネットワークをつうじて記録が残されている、この自覚性を明らかにしている。きわめて短期に潰えた小雑誌でも、こうした交換・交流に参加したのだが、その交流は、アヴァンギャルド諸潮流を広く知らしめた、大陸全域に流通した定期発行雑誌である、コスタリカに基盤をおく『アメリカ輯報 *Repertorio Americano*』誌によっても補強されていた。

しかし、本書の各章での多様な文学アヴァンギャルド運動の共通基盤の究明作業においては、国別の差異を簡単に片づけてはいない。何らかの共通論題をめぐる数カ国の資料をひとつにまとめる作業は、つねに個々の作品が登場する個別の文脈に立ち戻ることである。それら各国の文脈にかんする、ごく簡潔なある論評は、ラテンアメリカ・アヴァンギャルドの複数性を強調している<sup>8)</sup>。アヴァンギャルドの文学活動がきわめて盛んだったのは、アルゼンチン、ブラジル、キューバ、メキシコ、ペルーであり、グループ活動よりもむしろ主要な作家の影響力を考えれば、チリであった。同

じく、広がりには欠けるが重要な活動が展開したのは、エクアドル、ニカラグア、プエルトリコ、ウルグアイ、そしてベネズエラにおいてだった。

イボリト・イリゴジェンおよびマルセロ・T・デ・アルベアールの改革派大統領時代にブエノス・アイレスを中心としたアルゼンチンのアヴァンギャルドは、相争う文化的・社会的多様性を刻印された急速に変化を遂げる都市の論争をもとめる雰囲気やを反映した、さまざまな芸術的・政治的姿勢の寄せ集め状態を呈していた。アルゼンチンのアヴァンギャルド作家たちは非常に活動的で目立ちやすく、あらゆるジャンルの文学作品を生み出し、さまざまな雑誌、出版社、挑発的な公開パフォーマンスにたずさわった。他の諸国とは対照的に、ここでは芸術至上主義的な芸術概念と政治的な芸術概念とのあいだの種々の境界線が、他にまして鮮明に引かれたのだった。文学史では一般的に二つの主要なグループ、「フロリダ Florida」と「ボエド Boedo」にかかわって芸術の刷新が分類されている。より芸術至上主義的な「フロリダ」は、アヴァンギャルド定期刊行誌『プリズム *Prisma*』（一九二一～二二年）、片面刷大判広告を一種類、『舳先 *Proa*』（一九二二～二三年、一九二四年～二六年）、そして広く配達された『マルティン・フィエロ *Martín Fierro*』（一九二四～二七年）を刊行した。このグループの文学的生産には、ホルヘ・ルイス・ボルヘスとオリベリオ・ヒロンド Olivario Girondo のウルトライズモ *ultraísmo* の詩、エドゥアルド・マリエア Eduardo Mallea とエドゥアルド・ゴンサレス・ラヌーサ Eduardo González Lanuza の散文小説、その他多くの作家たちの作品などが含まれていた。女性たちがアヴァンギャルド諸活動に積極的あるいは目につくように参加することはめったになかったが、「フロリダ」には、ヒロンドと結婚していた詩人で散文小説家のノラー・ランゲ Norah Lange が含まれていた。左翼の「ボエド」グループのメンバーは社会問題に関与する芸術を好み、『明晰 *Claridad*』誌（アンリ・バルビュス Henri Barbusse のパリの「クラルテ *Clarté*」グループに精神的に倣っていた）を発行、同名の出版社を設立し、詩と散文小説をつくった。おそらくロベルト・マリアーニ Roberto Mariani の散文小説が「ボエド」が世に問うたものの作品中もっとも有名なものだろう。メンバーたちはまた、永く続いた「人民劇場 *Teatro del Pueblo*」を組織したが、これはアルゼンチンの演劇作品生産の性格を変えるものだった。とはいえ、クリストファー・タウン・リーランド Christopher Towne Leland が指摘しているように、双方のグループから評価されたがどちらにも加わらなかった小説家・戯曲作家ロベルト・アルルトの人物像が示しているごとく、この二つのグループ間の境界線はしばしばぼやけている。同様に困難なのは、それぞれのグループに首尾一貫した文学スタイルを帰させることである。アルゼンチンのアヴァンギャルド、とくに「フロリダ」グループは、総じて綱領的な文化ナショナリズム、つまり土着主義的な緊張関係や関心事を表明するような類の出来事には慎重だった。そうした出来事には、『マルティン・フィエロ』という誌名（ガウチョの生活を描いた十九世紀の古典的詩作品の題名からとられた）をめぐる激論や、「フロリダ」が以前にとっていたパリ風（国籍ではない）の指向性への「ボエド」による攻撃、そして消滅させられたガウチョを国民神話に変形したりカルド・グイラルデス Ricardo Güiraldes の一九二六年の小説『ドン・セグンド・ソンプラ *Don Segundo Sombra*』に対する「フロリダ」の追従が含まれていた<sup>9)</sup>。

モデルニスモという語が、一九二〇年代初頭から一九四〇年代半ばにいたるブラジル文学の刷新を指し示しているも、一九二〇年代のそのラディカルな革新活動はスペイン語圏アメリカのアヴァンギャルドと並行関係にあった。ブラジルの旧共和政（一八八九～一九三〇年）のこの時期は、凝り固まった地方の寡頭支配に反対して開始されたばかりの（だが大きな成功をおさめていない）諸闘争、

台頭する中産階級による政府による改革をもとめての圧力、一九二二年の独立百年記念と符合した国民の自己規定に傾注された関心、そしてこの国の自律的に展開をとげつつある諸州のなかで一頭地を抜くサン・パウロの存在によって、特徴づけられた。重要な活動表明がリオ・デ・ジャネイロやミナス・ジェライス州のベロ・オリゾンテおよびカタグアゼスでも進展したとはいえ、サン・パウロというこの都市はその点でも一頭地を抜いてアヴァンギャルド活動にとっての中心的な場を提供したのだった。サン・パウロで一九二二年二月に開催された、さまざまな分野の芸術祝典である「近代芸術週間 *Semana de Arte Moderna*」は、独立百年記念行事と時期を同じくし、文化ナショナリズムへとひたすらに向かうブラジル・アヴァンギャルド運動の傾斜を予示する一個の結び目となったのだった。その領域横断的な本性によって特徴づけられることで、ブラジルのアヴァンギャルド活動は二人の後に正典化されることとなる主要人物を生み出した。詩人・小説家・音楽学者・民俗学者・文学評論家のマリオ・ジ・アンドラーヂと、宣言の著者・詩人・小説家・演出家・文化の理論家であるオズヴァルド・ジ・アンドラーヂである。その他の重要な作家には、マヌエル・バンデイラ *Manuel Bandeira*、ラウル・ボップ *Raul Bopp*、ロナルド・ジ・カルヴァーリョ *Ronald de Carvalho*、カルロス・ドゥルモン・ジ・アンドラーヂ *Carlos Durmond de Andrade* といった詩人たちがいる。主要な雑誌は、『クラクション *Klaxon*』（サン・パウロ、一九二二～二三年）、『赤い大地とその他の大地 *Terra Roxa e Outras Terras*』（サン・パウロ、一九二六年）、『祝祭 *Festa*』（リオ・デ・ジャネイロ、一九二七～二八年）、『批評 *A Revista*』（ベロ・オリゾンテ、一九二五～二六年）、『緑 *Verde*』（ミナス・ジェライス州カタグアゼス、一九二七～二八、二九年）、そして衝撃の強さにおいてもっとも重要な『食人雑誌 *Revista de Antropofagia*』（サン・パウロ、一九二八～二九年）があった。三人の女性が初期ブラジル・アヴァンギャルドの創作にめだって寄与している。その三人とは、「近代芸術週間」に参加したキュビズムの画家アニータ・マルファッティ *Anita Malfatti*、オズヴァルド・ジ・アンドラーヂの二人目の妻であり「食人」グループの主要な文化批評の記事を寄せた、画家のテルシラ・ド・アマラル *Tersila do Amaral*、それに『祝祭』誌に短期間協力した詩人のセシリア・メイレーレス *Cecília Meireles* である。ペルー・キューバ・ニカラグアの場合と同様に、ブラジルのアヴァンギャルド活動には、ローカルな土着主義のこだわりにくわえ、多くの創造的作品に見られるのだが、幅広いアメリカ主義的な色合いによって、はっきりと表れることがしばしばだった<sup>10)</sup>。

チリのアヴァンギャルドは、労働者と成長しつつある中産階級とが伝統的な寡頭政治に対して公的な職務へのより自由な参加をもとめて圧力をかけていた、こわばり一貫性を欠いた改革派政権期に登場した。ラテンアメリカのアヴァンギャルドをたんに各国特有の見地から特徴づけることに内在する陥穽を背景におきながらだが、チリは、その革新的活動が多くの場合に一国的あるいはローカルであるよりも国際的・大陸的なものであった、二人の並外れた人物を生み出している。ピセンテ・ウイドブロ——詩人、小説家、劇作家、宣言執筆者、映画脚本家——は、ラテンアメリカ・アヴァンギャルドの先駆者かつ創始者として広く知られている。パリのアヴァンギャルドへの活発な参加者だった彼はまた、マドリッドで一九二一年から一九二四年まで雑誌『創造 *Creación*』を発行した。模倣に反対する文学を信条としたウイドブロの創造主義 *creacionismo* は、芸術の自律がもつさまざまな徳目を称揚した。だがウイドブロの美的アクティヴィズムと政治的アクティヴィズムは、一九二〇年代チリの政治的な出来事を風刺した一九三四年の戯曲『月光の中で（うわのそら）』をつうじてだけでなく、一九二五年の彼自身によるチリ政界への闖入からもわかるように、ときに重なり合っていた。短命に終わった彼の雑誌『行動 *Acción*』では、彼は国家改革のためのプログラムを

唱道するためにアヴァンギャルドのスタイルを採用した。一九二〇年代および一九三〇年代初頭、ウイドブロの同国人である、二〇世紀の偉大な詩人のひとりパブロ・ネルーダ Pablo Neruda は、シュルレアリスムの多くの特徴をそなえた詩を創作した。ウイドブロの『創造』誌と同じように、ネルーダが主体となった雑誌『詩のための緑の馬 *Caballo Verde para la Poesía*』はマドリッドで発行された（一九三五～三六年）。しかしネルーダは一九二〇年代に、激しい喧嘩腰でしばしば、他のチリのアヴァンギャルド作家やアヴァンギャルド雑誌にからんでもいる。ローカルな活動により積極的だった坂には、詩人のフアン・エマール Juan Emar やフアン・マリーン Juan Marín にならんで、詩作と散文小説の双方を書いたパブロ・デ・ロカ Pablo de Rokha やロサメル・デル・バジェ Rosamel del Valle が含まれていた。マリア・ルイサ・ボンバル María Luisa Bombal の散文小説はアヴァンギャルドが終わろうとする時代に初出版されたものではあるが、その作品は、パリやチリ、ブエノス・アイレスでのアヴァンギャルド活動と彼女がもった接触をはっきりと示している。チリ国内のアヴァンギャルド雑誌は、政治的争論を好んだサンティアゴの『明晰 *Claridad*』（一九二〇～二四年）のほか、バルパライソの『アンテナ *Antena*』（一九二二年）、『楕円 *Elipse*』（一九二二年）そして『ンギリャトゥーン *Nguillatún*』（一九二四年）が発行された。土着主義のアジェンダが『ンギリャトゥーン』誌ならびに一九二七年から一九三四年にかけて登場したサンティアゴのルンルニスモ *runrunismo* の詩人たちの活動を特徴づけている一方で、『アンテナ』誌に掲載された「羅針盤 “Rosa Náutica”」宣言（一九二二年）は未来派やスペインのウルトラリスモに対する強い親近感を示した<sup>11)</sup>。

二〇世紀はじめの三十年間、アメリカ合衆国の保護国として、キューバが経験したのは自国の経済状態や政治活動への合衆国の関与による締め付けとますます腐敗していく自国政府であった。ハバナを中心としたキューバのアヴァンギャルド活動の種は、アルベルト・サヤス Alberto Zayas 大統領の抑圧施策とその後を襲ったヘラルド・マチャード独裁政権に対する、学生活動家たちや中産階級の政治改革論者そして労働運動指導者たちの集団的な反発の中にまかれたのだった。一九二三年に結成された「少数派」グループは、一九二七年に多面的な知的活動・社会改革・美的革新に身をささげるといふ宣言を発表した。この文書の署名者たちの何人か——アレホ・カルペンティエール、マルティ・カサノーバス Martí Casanovas、フランシスコ・イチャーソ Francisco Ichaso、ホルヘ・マニャーチ Jorge Mañach、そしてフアン・マリネージョ Juan Marinello——はさらに、影響力をもち比較的長くつづいた『進歩評論 *Revista de Avance*』（一九二七～三〇年）を創刊し、同誌は芸術の刷新とキューバの文化生活の双方にとっての重要な核となったのである。社会的・美的アクティビズムをその知的な企図の構成要素として了解しつつ、『進歩評論』誌は、キューバの、ラテンアメリカの、そしてヨーロッパの作家たちにとっての議論の場を提供し、視覚芸術分野での近代的展開を推進し、ラテンアメリカの他の主要な雑誌との交流を実行にうつした。同誌はまた、ホルヘ・マニャーチによるキューバのアイデンティティの古典的な探究の書『からかいの調査 *Indagación del choteo*』からのいくつかの章や、フアン・マリネージョの「詩人ホセ・マルティ “El poeta José Martí”」および「キューバ的不安について “Sobre la inquietude cubana”」を掲載したことにもみられるように、国民の自己規定に対する強い懸念とその時代のキューバの知的活動総体に特徴的な土着の文化諸形式に対する高い関心とを反映していた<sup>12)</sup>。キューバのアヴァンギャルドの文学生産は、『進歩評論』の勢力範囲の内でも外でもおこなわれたが、それにはアレホ・カルペンティエールの初期散文小説・詩・実験劇作品、ニコラス・ギジェン Nicolás Guillén のアフロ・キューバ詩、マリアーノ・ブルル Mariano Brull の韻文における音声重視 *jitanjáfora* の言語実験、マヌエ

ル・ナバロ・ルナ Manuel Navarro Luna による詩や、1930年代のエンリケ・ラブラドル・ルイス Enrique Labrador Ruiz による「ガス状 *gaseiforme*」小説群が含まれている<sup>13)</sup>。

メキシコのアヴァンギャルドは、革命のもっとも活動的な局面と一九三〇年代半ばの革命が約束したことごとを完遂しようというラサロ・カルデナス Lázaro Cárdenas によって着手されたきわめてラディカルな取り組みとにはさまれた、暫定期間にある一九二〇年代初頭に展開した。ホセ・バスコンセロスの指揮のもとで重要な農村部教育改革が取り組まれたものの、一九二〇年代の短命な任期に終わった大統領たちは、正真正銘の労働者や左翼の異議申し立てを無効化しようと目論んだのだ。メキシコのアヴァンギャルドは二つの主要なグループとして登場した。その始まりから二〇年代半ばまできわめて活発だったエストリデンティスタたち *estridentistas* と、一九二八年から一九三一年まで発行された彼らのグループの雑誌から事後的に同一のものとされた「同時代人」の人びとである。どちらのグループもまずはメキシコ・シティで活動したが、エストリデンティスタはベラクルスのハラパでも活動を行っている。この二集団のうちでより政治的としばしば考えられているが、エストリデンティスタは自分たちの文化的プロジェクトを、革命が示した活動家精神についての公開教育としてとらえていた。わずかな期間しかもたなかった彼らの刊行物には、片面印刷の大判広告『アクトゥアル *Actual*』(メキシコ・シティ、一九二一～一九二二年)、『照射機 *Irradiador*』(メキシコ・シティ、一九二三年) および『地平線 *Horizonte*』(ハラパ、一九二六～二七年) がある。メンバーには詩人のマヌエル・マプレス・アルセ Manuel Maples Arce、ヘルマン・リスト・アルスピデ Germán List Arzubide、ルイス・キンタニージャ Luis Quintanilla や、散文作家のサルバドル・ガジャルド Salvador Gallardo、ハビエル・イカサ Xavier Icaza、アルケレス・ベラ Arqueles Vela、そしてその木版画挿絵が数々のエストリデンティスタの刊行物をかざった、画家のラモン・アルバ＝デ＝ラ＝カナル Ramón Alva de la Canal が含まれていた。その他の集団活動には、短命に終わった「蝙蝠劇場(夜間劇場) Teatro del Murciélago」などがあつた。エストリデンティスタたちは、近代的な都市のカフェがかもす雰囲気の中での彼らのグループのさまざまな活動を記録したアルケレス・ベラの短編小説『名もなき者のカフェ *El café de nadie*』が示しているように、自分たちをコスモポリタンの運動と考えていた。また、「五つの歌からなるポリシェヴィキの超絶詩 “Superpoema bolichevique en 5 cantos”」なる副題をもちメキシコの労働者に献じられたマプレス・アルセの長編詩「大都会 “Urbe”」からわかるように、彼らは国際主義者の政治に親近感を表明している。同時に彼らは、イカサの散文小説やアルバ＝デ＝ラ＝カナルの木版画のような、明らかに土着性を示す作品を推奨した。

一方、その主要な雑誌である『ユリシーズ *Ulises*』(一九二七～二八年)と『同時代人 *Contemporáneos*』(一九二八～三一年)が二〇年代後半になるまで発刊されなかったのだが、幾人かの早熟な青年作家は一九二〇年代も早くに、そうした雑誌に結実する自分たちの結社をつくろうというプロジェクトにかかわっていた。彼らはエストリデンティスタたちよりも政治的ではないと考えられているが、その何人かは一九二一年にメキシコ・シティで開催された国際学生会議に参加し、ホセ・バスコンセロスの遠大な改革活動に公教育省を介してたずさわり、学際的で社会問題解決指向の雑誌『教師 *El Maestro*』(一九二一～二三年)に文章を寄せていた。また別の何人かは『ファランヘ：ラテン文化評論誌 *La Falange: Revista de Cultura Latina*』(一九二二～二三年)に加わったが、これは後に「同時代人」グループの中心人物となるハイメ・トレス＝ボデ Jaime Torres Bodet の編集による雑誌で、北米文化の侵入に対抗してスペイン語圏のラテン的特質がもつ伝統を擁護する内容であった。広く

行きわたったこのグループの中心的な雑誌『同時代人 *Contemporáneos*』は、主にベルナルド・オルティス＝デ＝モンテジャーノ Bernardo Ortiz Montellano によって編集されていたが、高い質の知的・文学的な活動の場を提供した。この雑誌に載った文学の分野には、詩、散文小説、戯曲が含まれていた。グループの補助的なメンバーの参加にもよって、セレスティーノ・ゴロスティーサ Celestino Gorostiza、ハビエル・ビジャウルティアおよびサルバドル・ノボ Salvador Novo は実験的な「ユリシーズ劇場 Teatro Ulises」の組織化にも取り組んだ。この集団活動や、より長続きした活動で同様に「同時代人」グループの数人のメンバーの共同で組織した「新方針劇場 Teatro Orientación」は、メキシコの近代演劇の発展の基礎をつくりあげる出来事であった。アントニエッタ・リバス・メルカド Antonieta Rivas Mercado は、ナショナリズムを訴えるバスコンセロスの大統領選キャンペーンにも参加したメキシコ・シティ在住の文化活動家で野心的な作家だが、「同時代人」の演劇への取り組みに対する、創造的かつ財政的な支援を申し出た。このグループへの参加者は他に、ホルヘ・クエスタ Jorge Cuesta、ホセ・ゴロスティーサ José Gorostiza やカルロス・ペジセル Carlos Pellicer などであった。「同時代人」による文学生産には、詩・散文小説・戯曲・旅行記・文学批評が含まれており、ノボ、トレス＝ボデやビジャウルティアは多彩な分野で重要な作品を生み出した。メキシコおよびラテンアメリカの文化状況を深く憂慮してはいたものの、ほとんどの「同時代人」への参加者は、彼らの時代のメキシコの知的生活の多くを特徴づけている、論争を呼ぶ類の文化ナショナリズムを避けるようになったのだった<sup>14)</sup>。

ペルーの文学アヴァンギャルドは歴史的にアウグスト・B・レギーアの十一年間の改革独裁期と一致している。レギーアは資本と労働とのあいだでの同盟関係をもとめ、二〇世紀はじめの二十年間に台頭してきた労働運動とラディカルな学生たちによる重大な異議申し立ての根絶をさぐる一方で、皮相的な社会改革・教育改革に着手した。リマにおける文学アヴァンギャルドはホセ・カルロス・マリアテギの『アマウタ』誌（一九二六～三〇年）周辺で徐々に展開した。レギーアの政府に締め付けられながらも、開かれた質をもった知的・政治的交流を維持することを計画の一部とするこの雑誌は、その折衷主義と幅広さにおいてキューバの『進歩評論』に比肩されうるものであり、キューバの雑誌と同様に文化活動のより一層広範な文脈の内部で芸術を概念化していた。多数にのぼる先住民族人口をペルーの主流文化に同化させようというレギーアの計画とは対極的に、『アマウタ』誌は先住民族の文化とさまざまな芸術の形式が有する固有の価値を肯定した。学生の改革活動によって都市へと連れ出された多数の地方人々たち *provincianos* が、リマのアヴァンギャルドに参加した。ペルーはまた、もっとも刊行が長続きした地方雑誌であり、リマにおける同類『アマウタ』と同じよう先住民族権利擁護のアジェンダに献じられた、プーノの『ティティカカ紀要 *Boletín Titikaka*』（一九二六～三〇年）を生み出してもいる。

その他、数々の短命なアヴァンギャルド雑誌が、1920年代のあいだにリマ、アレキパ、クスコに現れた。ローカルなアヴァンギャルド活動に能動的にかかわるのを避けて、そうしたローカルな活動をくりかえし批判してきたにもかかわらず、ペルーの代表的なアヴァンギャルド詩人であるセサル・バジェホは、パリにおいて短命なアヴァンギャルド定期刊行誌『愛するパリの詩 *Favorables Paris Poema*』をファン・ラレーア Juan Larrea と共同で編集していた。皮肉なことにバジェホの同国人の多くは、彼らが支持しバジェホが紛れもなく拒否していた土着主義的アヴァンギャルドの最良の実例としてバジェホの詩を受け取ったのだった。他の注目すべき作家には、次のような人びとがいた。ペルーのアヴァンギャルド詩の枢要な先駆者としてとらえられた、象徴主義のホセ・マ

リア・エグーレン José María Eguren。自分の文学的信条たる単純主義 *simplismo* を確立した地であるブエノス・アイレスに移住した、詩人のアルベルト・イダルゴ Alberto Hidalgo。シュルレアリスム詩人のセサル・モロ César Moro とエミリオ・アドルフォ・ヴェストファーレン Emilio Adolfo Westphalen。ともにインディヘニスモのテーマとモチーフでアヴァンギャルド詩を書いた、カルロス・オケンドー＝デ＝アマとアレハンドロ・ペラルタ Alejandro Peralta。詩人で散文小説家のマルティン・アダン。そしてシュルレアリスムとインディヘニスモを兼ねた散文作家のガマリエル・チュラタ Gamaliel Churata。しかし、アヴァンギャルドによる芸術のさまざまな再定義との一致を考えれば、ペルー・アヴァンギャルドの現地での中心人物は、創造的な作家ではなく文化活動家であり文学評論家だったマリアテギにほかならないというのが適切だ。同じく注目すべきは、詩人で政治活動家でありいくつもの小雑誌の共同創刊者だったマグダ・ポータル Magda Portal や『アマウタ』誌の映画批評担当者のマリア・ヴィーゼ María Wiesse をはじめとした、ペルーのアヴァンギャルド活動における女性たちのプレゼンスである<sup>15)</sup>。

アルゼンチン、ブラジル、チリ、キューバ、およびペルーの諸運動にくらべると規模が小さく長続きもしなかったが、エクアドル、ニカラグア、プエルト・リコ、ウルグアイ、そしてベネズエラでも、重要なアヴァンギャルド活動が展開した。一九二〇年代のエクアドルは、激しいリベラル派と保守派の闘争、進歩的な政治変革と社会改革をもとめて高まりつつあった圧力、大学への入学をもととした広範な階級基盤が促した学生運動、そして短期間の独裁政権（一九二七～三〇年）によって、際立っている。ウンベルト・ロブレス Humberto Robles によれば、それらの出来事がエクアドルのアヴァンギャルドがおこなった種々の探究や実験を広く行きわたった文化的な政治や論争に絡み合わせたのだった。短命な雑誌には、『悪食家 *Singulus*』（一九二一年）、『プロテウス *Proteo*』（一九二二年）、『モーターサイクル *Motocicleta*』（一九二四年）があった（すべてグアヤキルで発行）。重要な文学的実験には、ウーゴ・マヨ Hugo Mayo の詩やパブロ・パラシオ Pablo Palacio の散文小説および短い演劇実験作が含まれており、アヴァンギャルドのさまざまな技法は、この国の指導的な二〇世紀詩人のひとりであるホルヘ・カレーラ・アンドラーデ Jorge Carrera Andrade の初期の詩作を方向づけたのだった。それにもかかわらず、エクアドルのアヴァンギャルド活動はおそらく、同国の文化状況の核心に新たな国際的な芸術の諸潮流が関係したかどうかについての長きにわたった論争のひとつとして特徴づけられるのが、せいぜいのところだろう。ロブレスが主張するには、古典的芸術概念と社会問題に関与する芸術という概念とに両極化したポジションはわずかな中間領域しか許さず、二〇年代末までに社会志向の芸術は規範になってしまったというのである。社会的、アメリカ主義的、あるいはインディヘニスモ的な関心事はしばしば、アヴァンギャルド的な考えを真に支持した人びとやアヴァンギャルドのさまざまな実験に取り組んだ人びとの思考を特徴づけたのだった<sup>16)</sup>。

遅れての展開にもかかわらず、ニカラグアのアヴァンギャルド活動は、この国の文化生活における一個の枢要な出来事であるとともに中米におけるアヴァンギャルド関係で唯一の持続的集団行動をなすものだった。一九二〇年代末から一九三〇年代初頭にかけて、ニカラグアの保守派とリベラル派は権力闘争をおこなっていた。パナマ運河の代替地をもとめて、米国は同国の経済状況と政治問題に二十年間にわたって介入しつづけており、米国の関与に対する民族自決と抵抗の進歩的シンボルとしてアウグスト・セサル・サンディーノが登場したのだった。その政治的忠誠の方向は最終的にさまざまに分かれてしまったが、ニカラグアのアヴァンギャルド表現者たちも同じように彼ら

の地域における米国の軍事的関与に反対していた。米国の詩人たちとの接触はみずからの創作活動にとって重要でありつつも、同時に彼らは自分たちの国の言語的・文化的な自主性のために取り組んだのだった。グラナダ出身の青年詩人たちのグループである、「ニカラグ反アカデミー Anti-Academia Nicaragüense」には、パブロ・アントニオ・クアドラ Pablo Antonio Cuadra、ホアキン・パソス Joaquín Pasos、オクタビオ・ローチャ Octavio Rocha、そしてホセ・コロネル・ウルテチョ José Coronel Urtecho が加わっており、この文化的プロジェクトに一九三一年から三二年に取り組み始めた。グラナダの日刊紙『グラナダ新報 *El Correo*』に定期掲載された「アヴァンギャルド *vanguardia*」および「アヴァンギャルド・コーナー rincón de vanguardia」のページは、このグループの定期刊行物となっていた。グループの開始宣言でもとめられているのは、国際的なアヴァンギャルドの諸潮流の普及をつうじたニカラグアの文化的刷新とあらゆる分野での国民的な芸術形式の発展であった。リマの『アマウタ』誌やハバナの『進歩評論』誌の提携者たちと同様に、「反アカデミー」は活動家の研究グループに似ていた。その活動には、討論や論争、公開パフォーマンス興行、そして実験作業に組み入れられるべきニカラグアの民俗および民衆の言葉・詩・音楽の諸形式を収集することが含まれていた。文学生産に入れられていたのは、主に詩、いくつかの実験的散文作品、文学的な短評、それにパフォーマンス作品である。短期で解散したこのグループの作業は後年の長いあいだニカラグアの芸術状況に深甚な影響をおよぼし、クアドラはこの国の主要な現代作家・知識人のひとりとなるにいたったのである<sup>17)</sup>。

「<sup>ステータス</sup>地位」問題、すなわちプエルト・リコが米国と取り結んできた変則的な植民地関係のありようが、二〇世紀全体をつらぬくこの島の政治的・文化的状況をかたちづくってきた。一九三〇年代初頭にふたたび興った自治あるいは独立の主張と政治的・知的状況におけるナショナリズムの持続的表明に向かう道を開きながら、一九二〇年代のあいだ、この問題にかんする政治的ポジションは書き直されつづけたのだった。プエルト・リコのアヴァンギャルド活動は、こうした長い歳月にまたがっており、土着主義的関心事の比較的な強化で目立っていた。この革新をもとめる活動には、以下にあげるような詩人たちからなる相対的に小さなグループによって始められた、さまざまな「イズム」の急速な移り変わりが含まれていた。それらの小グループとは、「<sup>ディエパリスモ</sup> *diepalismo*」<sup>【訳注2】</sup>（一九二一～二二年）、「<sup>陶酔主義</sup> *euforismo*」（一九二三～二四年）、「<sup>否認主義</sup> *noísmo*」（一九二五～二八年）、「小指」グループ Grupo Meñique（一九三〇～三一年）、そしておそらくプエルト・リコの詩に与えた長期にわたるインパクトをつうじてもっとも長続きをしたと思われる「<sup>監視主義</sup> *atalayismo*」（一九二九～三五年）である。定期刊行誌には、いずれも東の間に終わった『灯台 *Faro*』（一九二六年）、『渦 *Vórtice*』（一九二六年）、『オストス *Hostos*』（一九二九年）や、より間口が広いと思われていた『指標 *Índice*』（一九二九～三一年）があった。文学関係の主要な人びとは、ヨーロッパ・アヴァンギャルドとプエルト・リコとの架け橋であったエバリスト・リベラ＝シェヴルモン、ホセ・I・デ・ディエゴ・パドロー José I. de Diego Padró、ルイス・パレース・マトス Luis Palés Matos、ビセンテ・パレース・マトス Vicente Palés Matos、ルイス・エルナンデス・アキノ Luis Hernández Aquino、グラシアニー・ミランダ・アルチージャ Graciany Miranda Archilla、そしてクレメンテ・ソト・ベレスといった詩人たちだった。総体としてプエルト・リコのアヴァンギャルド活動は、詩と言語実験の優位によって、アメリカ主義的大陸志向によって、国民的モチーフやアンティール諸島のモチーフへの徐々に台頭しつつあった焦点化、そして重要な文化的実在としての西アフリカの言語と文化についてのこの島における初めての文学的肯定によって、特徴づけられたのである<sup>18)</sup>。



二〇世紀初頭の数十年間のウルグァイが示したものは、一説によれば、「ラテンアメリカにおける政治の民主化と社会の近代化のもっとも幸福な実例」(Halperin Donghi 326)であった。繁栄をとげるモンテビデオと大農園主による相変わらず支配されている地方のあいだのときに著しい分裂にもかかわらず、民衆の改革派の大統領ホセ・バトル＝イ・オールドニェス José Batlle y Ordóñez は都市部と農村部を折り合わせることを追求したのだった。トゥリオ・ハルペリン・ドンギ Tulio Halperin Donghi によれば、その時代は変化にたいする開放性と国民的アイデンティティについての楽観的な感覚が目立っていた(同書三二三～二六ページ)。一九二〇年代のウルグァイのアヴァンギャルド活動は、主要なアヴァンギャルド雑誌のひとつである『ペン *La Pluma*』誌にかんしてグロリア・ビデラが明らかにしているように、他の地域とよく似た時代精神のなかで、間口が広い折衷的——国際的な影響範囲に対してもラテンアメリカでの影響範囲に対しても開かれていた——であると同時に、しばしばその関心事をめぐっては排外的土着主義の姿勢をとっている<sup>19)</sup>。実験的な文学の生産は第一に詩の分野であり、それにはウルトライェスモのペドロ・レアンドロ・イプーチェ Pedro Leandro Ipuche やフェルナン・シルバ・バルデス Fernán Silva Valdés のよる排外的土着主義詩、カルロス・サバト・エルカステイ Carlos Sabat Ercaasty のアメリカ主義詩、イルデフォンソ・ペレーダ・バルデス Ildefonso Pereda Valdés によるアフロネグリスモ *afronegrismo* の詩、ニコラス・フスコ・サンソン Nicolás Fusco Sansone によるウルトライェスモのさまざまな実験、そして一九二七年の作品集『バス一台をまるまる食った男：ナフタの臭いのする詩集 *El hombre que se comió un autobús: Poemas con olor a nafta*』の創作者であるアルフレード・マリオ・フェレイロ Alfredo Mario Ferreiro による折衷主義的アヴァンギャルドの種々の文章が含まれている。フェリスベルト・エルナンデス Felisberto Hernández は重要な実験散文小説を執筆した。芸術の新潮流の普及活動をおこなったモンテビデオの雑誌には、『新たな人びと *Los Nuevos*』(一九一九～二〇年)、『ペガサス *Pégaso*』(一九一八～二四年)、『南十字星 *La Cruz del Sur*』(一九二四～三一年)、そして『決闘状 *Cartel*』があった。しかし、まずアルベルト・ツム＝フェルデ Alberto Zum Felde に、そして後にカルロス・サバト・エルカステイによって編集された『ペン』誌は、国際的な諸潮流と大陸的な交流関係およびローカルな関心事とを総合した点で、おそらく他のさまざまなラテンアメリカ・アヴァンギャルドの重要雑誌にもっとも比較可能なものだったろう。

ファン・ビセンテ・ゴメスの独裁政治が一九二〇年代のベネズエラの政治状況をかたちづくり、それが生み出した増大する不満をつうじて、この国の文化状況もまた特徴づけた。ベネズエラでの集団的なアヴァンギャルド活動は、相対的に遅くに展開し短命であったが、オソリオによれば、一九二八年に最高潮に達した学生・知識人の抵抗運動がもたらした雰囲気、長期にわたる結果をとともう芸術と文化とにかんする新たな思考を生成したのである。なかでも重要な二つの雑誌が、国際的・地域的なアヴァンギャルド諸潮流にかんする情報を広めた『エリート *Elite*』(一九二五～二八年)と、「われわれは“somos”」宣言を掲載した一号かぎりの『バルブ *válvula*』だった。ベネズエラの青年知識人・芸術家たちのアヴァンギャルド・ネットワークへの参加は、大陸のあちらこちらの他の雑誌に載ったベネズエラの作家たちやベネズエラ政治情勢にかんするコメント欄にも記録が残されている。革新的な文学生産には、アントニオ・アライス Antonio Arráiz、ルイス・バリオス・クルス Luis Barrios Cruz (彼のさまざまな作品は土着主義的モチーフを示している)、そしてホセ・アントニオ・ラモス・スクレ José Antonio Ramos Sucre の詩、ならびにフリオ・ガルメンディーア Julio Garmendia とアルトゥーロ・ウスラール・ピエトリ Arturo Usler Pietri の散文小説などが

あった<sup>20)</sup>。その他に近年の研究成果が示しているのは、テレサ・デ＝ラ＝パラの小説群と知的生活を、アヴァンギャルドの言説にかんしての彼らの複雑な相互関係において再検討することが有益な結果をもたらさうということである<sup>21)</sup>。

その他の諸国のアヴァンギャルド活動は、一作品あるいはひとりの作家に限定されたきわめて短期間のものか、ラテンアメリカにおけるアヴァンギャルド諸運動を通常規定している歴史的・芸術的なパラメータの内部で考察されるためにはその登場があまりに遅すぎるものである。しかしながら、それ以外の二、三の動きには言及する必要がある。ドミニカ共和国では、アンドレス・アベリーノ Andrés Avelino が署名した、早い時期の「没後派 *postumista*」宣言（一九二一年）とドミンゴ・モレーノ・ヒメネス Domingo Moreno Jimenes の詩が、後年にキューバとプエルト・リコ双方の地に登場する土着的・アメリカ主義的関心事を先取りしていた。批評家はコロンビアの雑誌『新事象 *Los Nuevos*』（一九二五年）も、同誌をアヴァンギャルド表現者として出版した詩人たちのグループも特徴づけることに躊躇したままだが、しかしレオン・デ＝グライフ León de Greiff（言語実験および音楽実験を介して）とルイス・ビダーレス Luis Vidales はアヴァンギャルドの詩を書いていたのである。グアテマラ自体には注目すべきアヴァンギャルド活動はひとつも展開しなかったが、ミゲル・アンヘル・アストゥリアスの初期の散文小説・実験的戯曲やルイス・カルドーサ＝イ＝アラゴン Luis Cardoza y Aragón の詩はアヴァンギャルド運動への重要な貢献となっている。また、この両者ともパリとラテンアメリカのアヴァンギャルド・ネットワークに加わっていたのだった。

## 芸術の再人間化

地域的な差異にもかかわらず、ラテンアメリカ全域で興ったこれらのアヴァンギャルド活動の共通基盤は次章以降でとりあげる研究の焦点を与えてくれるものである。以下詳しく述べるように、これらの運動の各々はそれ自体のテーゼと結論を提示している。しかしそれらバラバラのひとつひとつは、総体としてのラテンアメリカ・アヴァンギャルドを特徴づけるために役立つ一個の概念によって結びあわされていた。それはアヴァンギャルドのもっている、芸術の「再人間化」に向かう駆動力である。この表現は、もちろん、ホセ・オルテガ＝イ＝ガセット José Ortega y Gasset が一九二五年に発表した画期的論考『芸術の非人間化 *La deshumanización del arte*』の表題を引き合いに出し改編したものである。そのことはまた、本書の五つの章をつうじて織りなされるラテンアメリカのさまざまなアヴァンギャルドにかんする三つの根本的な考え方を明確にするものでもある。三つのうちの第一は、ビュルガーの『アヴァンギャルドの理論』と同じく、アヴァンギャルドの諸運動は、オルテガが「非人間化された」ものとして特徴づけた芸術的戦略を推し進めたにもかかわらず、芸術と経験とのあいだの能動的な再連結を追求していた。しばしば規範的なものと誤読されたその記述的な論考で、オルテガは（アヴァンギャルドのみならず）近代芸術総体を「非人間化」されたものと性格づけた。この語は、対象と距離をおく近代芸術の反模倣的な質、あるいは近代芸術の「スタイルへの意志」を、すなわち芸術の人間的意義や生き生きとした形式を様式化あるいは「非現実化」する傾向を、強調することを意図したものであった（同書 67, HW25）。オルテガが見たところでは、近代的様式においては芸術の対象は、それが現実的でない度合いにのみ応じて、芸術的とされるのである。平均的人間は——彼はそう断言したのだが——もっとも日常生活に似かよっている芸

術を好むものなのに、近代芸術では「作品の人間の意義は原則として美の享受と相容れないのである」(同上 53, HW9-10)。こう指摘するために、オルテガは今では紋切型になった、庭を眺めるときの窓ガラスの例をつくりあげたのだった。模倣あるいはリアリズムの芸術はその受容者が庭や人間の意義に焦点をあわせることを促す一方で、オルテガの見るところでは、近代芸術は窓ガラスと芸術作品に内在する透明性へと知覚を転じてしまうのである。

対象とのあいだに距離をとることで知覚の諸様式を変移させる近代芸術の戦略にその焦点をあわせている点で、オルテガによる非人間化の概念は、初期のロシア・フォルマリストの「非親和化」(ヴィクトル・シクロフスキー Victor Shklovsky の一九一七年の論考「技法としての芸術」における *ostranenie*) という考え、あるいはベルトルト・ブレヒト Bertolt Brecht の言う異化効果 *Verfremdungseffekt* という考えに似ていないわけではない。それらの考えが、芸術がみずからその拵えものの実質を見せることによって引き起こされる、読者や観客の知覚習性の変化について強調している点において、たんなる形式的なレヴェルでそれらの概念すべてを、ビュルガーが『アヴァンギャルドの理論』で「非有機的」芸術作品と呼んだものと比較することが可能である。この「非有機的」芸術作品という語でふたたびビュルガーは、作品の構成要素である諸部分に対する注意を喚起し、作品の効果を消したり心地よい有機的な一個の総体として作品を知覚したりする受容者に抵抗する類の芸術について述べているのである。しかしビュルガーは——そしてここではブレヒトはその先行者ととらえることができるだろう——、対象との離間作用あるいは距離作用をもたらすアヴァンギャルド芸術の質を検討し、『芸術の非人間化』にみられるものとはまったく異なるその諸効果についての結論にたどりついているのである。それはすなわち、ビュルガーにとっては非有機的芸術がもっている距離作用の諸効果は技法の問題をはるかに超えたものをつくりあげているからである。

ビュルガーの主張では、歴史的アヴァンギャルドにおいては「受容者をの受けるショックが (...) 芸術的志向性の最高原理となる」(訳書二八ページ)、つまり一個の総体としてのアヴァンギャルド芸術内部にビュルガーが位置する原則になるのである。彼が断言しているのは、歴史的アヴァンギャルドの時期に、芸術家たちが芸術というカテゴリーと非芸術あるいは生から自立しているとするその主張に疑義を唱えたことによって、芸術は自己批判の段階にいたった、ということである。ビュルガーの主張によれば、アヴァンギャルド活動は芸術作品という観念への挑戦をはるかに超えたものにかかわり、相当に「芸術が生活実践から切り離され際立たせられているあり方の否定」(同上、七七ページ)を追求したのだった。そうであるならば、この観点においては、まさしく「非人間化」をつうじて、アヴァンギャルドが芸術の受容者たちに芸術そのものという考えおよび芸術と生徒の関係性について思考することを強いたというオルテガ的窓ガラスに対する注意の喚起によって、さまざまな知覚が改変されるのである。もしオルテガのメタファーをビュルガーの観点をつうじて濾過するならば、さまざまなアヴァンギャルドは、やっかいな光学的離れ業にもかかわらず、窓ガラスと庭園の相互作用、つまりは生への芸術の反照的関与に焦点をあわせるよう芸術受容者たちに挑んだのだと主張することができる。このように、オルテガが非人間化と呼んだ近代芸術が有する距離作用をもたらす質こそが、大衆を生きられた経験から引き剥がすのではなく、そうした経験へと差し向けるのである。

すでに述べたように、ラテンアメリカのアヴァンギャルドはアクティヴィズムの用語において芸術とさまざまな知的格闘を了解したのだった。ビュルガーの観点を敷衍しつつ、私も同じように、関与——知的、社会的、あるいは形而上学的な関与——を志向する駆動力が国際的なアヴァンギャル

ド運動の決定的な特徴であり、そのことがとりわけラテンアメリカでは事実どおりであったと、より具体的に主張しておきたい。芸術家たちは、より挑発的な仕方<sup>エンゲージメント</sup>で芸術を経験に対して向かわせる、まさにそのために、一群のアヴァンギャルドの諸活動の中から反模倣的な戦略を採用した。ただし「関与」という用語によって私が意味しているのは、すでにふれたように多くのアヴァンギャルド表現者たちが特定の瞬間に公然たる政治的主張へと転じたのが事実であるにもかかわらず、政治的に動機づけられた具体的な出会いの数々ではない。私は、読者や観衆をとまなう芸術作品や芸術イベントによる対抗的<sup>エンゲージメント</sup>なやりとりを含めて、さまざまな種類のかかわりや没入を指し示すために、より包括的にこの語を用いている。つまり、みずからの直接的な環境への芸術家たちの作業をつうじた批判的あるいは知的な関与も、理性を超えた充実をもとめる芸術家たちによる実存<sup>コスモス</sup>や完全体系への願望された形而上的関与も含まれている。さらにラテンアメリカでは、個々の国について示したように、アヴァンギャルド活動はラテンアメリカ固有の経験とみなされたものごとと実にしばしば批判的にかみ合っていたのである。

第二に、こうしたスタイルにおいては、芸術の「再人間化」という概念は、オルテガの論考に対するラテンアメリカ・アヴァンギャルド諸運動内部の同時代的な応答、すなわち、非人間化なる言葉そのものよりもオルテガの当該論文で提起された固有な論点に対する逆向きの反応をほのめかしている。ある語やその背後にある精神として感じ取られたものに対するこの否定的反応は、ラテンアメリカにおけるアヴァンギャルド活動の登場へのオルテガの貢献を決してみくびるものではなかった。フランスやイベリア半島のアヴァンギャルド運動と直接接触したラテンアメリカの作家たちによってつくりあげられた大陸間の結びつきにくわえて、広く流通していたオルテガの雑誌『西洋評論 *Revista de Occidente*』は近代芸術の最新の展開にかんする主たる情報源のひとつだったのである。この恩義はたびたび認められ、一九一六年と一九二九年のオルテガのラテンアメリカ訪問は永くつづく知的接触を育んだのだった。それでもなお、正確であろうとなかろうとオルテガの広く普及した論考の骨子として受け取られたものに対して、ラテンアメリカのさまざまなアヴァンギャルド運動においては、きわめて広範囲におよぶ反発が存在した。数えきれない宣言や批評文のなかで、そのもっとも近代的な形式においてさえ、芸術は経験をあつかうためのあらゆるものをそなえていると主張され、人間的とか人間化（された）といった言葉はラテンアメリカのアヴァンギャルド的言説においては紛れもない流行りの言い方になったのである。このことは必ずしもオルテガに対する直接的な応答にはなっておらず、ときにはたんにある特定の芸術的な指向性やトーンを表現するだけのものにとどまっていた。しかしながらたとえば、一九一六年の論文「詩の技法 “Arte poética”」のなかで、自然の薔薇をほめたたえるよりもむしろ、自分たち自身の薔薇を創造せよと詩人たちに力説した、ラテンアメリカでもっとも熱烈な芸術の自立の擁護者であるピセンテ・ウイドブロでさえ芸術のさまざまな人間化効果を評していることは、重要である。そのように、ウイドブロは、芸術は「事物を人間化する」べきである（OC 1: 680）と主張し、一九二五年の「諸宣言の宣言 “Manifiesto de manifiestos”」（オルテガの論考と同じ年に発表された）では、詩人たちはみずからの作品を染めあげるための一定量の「詩人に固有な人間性」をもつべきだと説明している。セサル・バジェホは、彼の詩が読者の理解を故意に妨害しているときでさえ、その詩の人間的な質がしばしば賛美されるが、あるやり方で芸術の創造者の生きられた経験とふれあうようなものとして「人間的な」芸術を定義し、芸術家たちにみずからの作品のなかに「人間的な特有の響き」を探しあてるように強く訴えた（MPP 242）。詩人のカルロス・ドゥルモン・ジ・アンドラージは、一九二五年のブ

ラジルの『批評』誌の創刊宣言での彼の行動計画に「ブラジルを人間化する」ための解決策を入れており、それが「現実の生活と抵触する」ことに準備ができていた芸術家たちによって完遂されるだろうと示唆したのだった (GMT 338)。

必ずしもオルテガほど徹底的に彼が提起した理論的諸問題を探究しなかったが、他の作家たちはじつに明確にオルテガの論考に対して反発したのだった。たとえば、プエルト・リコの定期刊行誌『渦』に寄せた一九二七年の文章の中で、詩人のエバリスト・リベラ＝シェヴルモンは生の哲学に沿いつつ社会に直接関与するような芸術活動の概念化を熱烈に主張し、近代芸術は接頭辞の非・*des-* (非人間化 *deshumanización* の語頭にあるような) を超・*super-* と置き換えることでもっともよく特徴づけられうるだろうと示唆している。新たな芸術は「非人間化されていかず、そのかわりに、それが人間性と自然の魂に浸透していく分だけ人間化されていく」と彼は主張した ("Trazos" 2)。シュルレアリスムにかんする観察において、アレホ・カルペンティエールは、「非人間化」という語を用いる人びと (彼はオルテガの名を挙げなかった) は感傷的で飼いならされた陰謀の近代的な遮断を正確に描いているのだと説明した。しかしそれにつづいて彼は、種々のアヴァンギャルドなかんづくシュルレアリスムを疎遠なもの、あるいは懐疑的なものとして特徴づけようとすることに反対の論陣を張り、彼の特徴づけは知的・芸術的営みのもつ価値に対する熱烈な忠誠の時代というものと断言している (HV 145-49)。キューバの『進歩評論』のマルティ・カサノーバスやペルーの『アマウタ』に執筆していたマグダ・ポルタルは二人とも、より明示的な社会政治的なトーンで人間化された芸術を要請した。カサノーバスは非人間化をブルジョア精神に帰し、たんなる形式的な質しかもたない種々の芸術的思弁を、それらが「人間的価値」あるいは「社会的超越性」を欠いているという理由で拒絶した。彼の主張するところでは、近代も含めたあらゆる時代の最良の芸術は、「その人間的肉実の豊かさ」に対応しているのである。オルテガの論考が登場してから二年後の一九二七年にポルタルが説いたのは、何人かの新芸術家は芸術の革新と社会的な関与のあいだのつながりを見落としているのに対して、より近年のラテンアメリカのアヴァンギャルド表現者たちは、「美と生の二重の使命」を自覚した「芸術の人間化」を標徴とする環境に現れてきている、ということだった (MPP 208)。

オルテガにもっとも直接的に応え、その中心的な諸論点をめぐる注意深い読みを示した、二人のアヴァンギャルド活動の支持者とは、メキシコの「同時代人」グループのハイメ・トレス＝ボデと、ペルーの『アマウタ』誌の編集者でありラテンアメリカとヨーロッパ双方のアヴァンギャルドにかんするラテンアメリカでもっとも炯眼な評者のひとりであるマリアテギであった。適切にも「芸術の非人間化」と題された一九二八年の文章において、その時点では自分自身の散文小説で反模倣的な戦略を繰り広げていたトレス＝ボデは、近代芸術は「人間に打ち勝つ」ことを追求しているというオルテガの評価に立ち向かったのだった (*Contemporáneos* 127)。彼の説明によると、芸術はつねに何らかの仕方で、芸術作品を追放している、オルテガが近代性だと信じた「無秩序な人間性」とつきあわなければならないのである。じっさいに芸術はいかに近代的であろうとも、様式化を模索する「人間の問題」との「闘い」をそもそも必要とするものだ、というのがトレス＝ボデの主張である (*Contemporáneos* 123-27)。トレス＝ボデはさらに、「現実そのもの」はつねに真の芸術作品に対する刺激を与えてくれると主張しつつ、新たな詩作にかんするある評論のなかで自分のポジションを強調している (*Contemporáneos* 29)。彼の重要な論考のひとつである「芸術、革命、デカダンス "Arte, revolución y decadencia"」のなかで、マリアテギは、オルテガの論考は多くの点で正鵠を射

ているが、同時にスペイン語圏世界内部で近代芸術の本性についての誤解を育んだことに責任がある、と示唆した。マリアテギが論ずるには、非人間化という概念は、何よりも近代芸術の超然とした精神（デカダンと彼は呼んでいる）に対応するものだが、社会に関与すると同時に革命的でさえあるその質を認識しそこねたのだった。他のいくつかの著作のなかで、マリアテギは技術的刷新と世界への批判的関与の総合を芸術家たちに訴えている。彼が「形式的征服」と呼ぶもの、すなわちオルテガの用語ではアヴァンギャルドの「非人間化された」諸戦略が有する批判力を認識してはいるものの、芸術が生と切り結ぶパラドクシカルな関係性が、関与する芸術の自立の在り方のひとつであるべきだということもまた、彼は主張したのだった。

このふたりの作家および彼らの同時代人の多くの作品には、新世界的指向性が、ラテンアメリカの芸術の人間の実質という問題を提出しながら、染みとおっていた。トレス＝ボデがそのことを詳細に述べている。彼が言うには『『芸術の非人間化』は、ヨーロッパの事実をふまえてヨーロッパ人に向けて書かれた、ヨーロッパの書物である。この状況は…感傷的な遺産と生物学的な隷属を免れて、自分たち自身の芸術を夢見るという危険を依然として冒しているアメリカの青年たちにとって、危険なものなのだ』（*Contemporáneos* 125）。マリアテギもまた、たびたび彼の世代のユートピア的アメリカ主義を批判して、いかなる新たな創造物も彼の生きる大陸の土壌から湧き出てくるだろうという主張を守る一方で、シュペングラーの理念的新世界主義の魅惑を彼の同時代人の多くと共有しており、ヨーロッパの戦後文化にかんする彼独特の評価を次のようなシュペングラー的メタファーで引き締めていた。いわく、「老残」の退廃文明はその「黄昏」と「日没」に直面している、等。こうして、芸術の「再人間化」という概念は、第三に、文学アヴァンギャルドにおいて具現化された近代性の諸流派との、ラテンアメリカの文化的に固有な関係性の問題をほのめかすものなのである。私はこの問題を第三～四章でより直接的にあつかうつもりだが、この問題は本書全体を象るものなのである。もっとも広義のレベルで、本研究は相当に明白な前提の上になりたっており、すでに各地域の展開を述べたさいに軽くふれているが、その前提とは、ラテンアメリカのアヴァンギャルドは、ヨーロッパの諸潮流との相互作用にもかかわらず、それ自体のさまざまな文化的文脈内部で繰り広げられたのであり、ラテンアメリカ・アヴァンギャルドが前向きにかかわった生の経験は、しばしばアヴァンギャルドに独特のものだった、というものである。より具体的には、ラテンアメリカの何人かの作家はアヴァンギャルドそのものを根本的にラテンアメリカでのひとつの現象として主張した。アメリカ主義と言語をとりあつかう章で論じているように、こうした動きはじっさいのところ、ラテンアメリカの革新芸術はヨーロッパのそれよりも「人間化」されているとするより幅広い主張とは本質的にまったく異なり、そのような主張とは逆のものさえあった。そうではなく、ラテンアメリカ・アヴァンギャルドの活動はときに、オルテガであれば非人間化と呼んだであろうものごとや疎遠や非有機性といった同じような考え方にひけをとらないさまざまなイメージを、たんなる美的戦略あるいは美的効果としてではなく、ラテンアメリカの生きられた歴史的経験に特有な種々の現象として構成したのである。

そのとき、芸術の「再人間化」という概念を要約するには、以下の三つの広範な考え方を指摘しなければならない。①ラテンアメリカのアヴァンギャルドは、芸術と生のかかわりをふたたびつくり上げることを模索した。②ラテンアメリカの作家たちはしばしば、さまざまな目的を計画しながら、オルテガが近代芸術の非人間化された質として特定したものを再形成し再定義することをもとめた。③ラテンアメリカのアヴァンギャルド活動は、ときにアヴァンギャルドそのもの、とりわけ、

特殊ラテンアメリカ的な現象として、オルテガの非人間化されたという言葉に含まれている、非親和化をすすめる特質を改変したのである。

### 訳注

- 1 ブラジル国旗が緑と黄（黄金）色からなっていることを踏まえる。
- 2 ディエパリスモという名称は、同人の父姓の頭文字を並べた文字列から名付けられたもので、特に意味をもつものではない。

### 注

- 1) 近年の研究がラテンアメリカのアヴァンギャルドの時期ととらえてきた年代はおおよそのものであり、フレキシブルなものである。フォースターとジャクソンは、一九二〇年から一九三五年にかけての指針を提供している (*Vanguardism in Latin American Literature*)。オソリオは一九一八年から一九三〇年までを示唆している (*MPP*)。さらにヴェラーニは一九一六年から一九三五年ととらえている (*HV*)。
- 2) ここで示した簡単な歴史的概観では広く知られた現象を列挙しているが、それは以下の書での意見にもとづいて書かれたものである。Thomas E. Skidmore & Peter H. Smith, *Modern Latin America*; Tulio Halperin Donghi, *Historia contemporánea de América Latina*。また、主な歴史の流れとアヴァンギャルドの登場の結びつきについては、ネルソン・オソリオの論文「イスマノアメリカ文学アヴァンギャルドの歴史的な特徴づけのために」の改訂版がおさめられている、オソリオによるアンソロジーの序文 (*MPP ix-xxxviii*) を参照した。
- 3) しかし重要なのは、女性の参政権がアヴァンギャルド時代末期に制度化されはじめたことである。エクアドルでは一九二九年、ブラジルとウルグアイでは一九三二年、キューバでは一九三四年に制度化がおこなわれた。フランチェスカ・ミラーの著書の九六ページを参照せよ (*Francesca Miller, Latin American Women and the Search for Social Justice*)。
- 4) カリネスクはその分析において、『アヴァンギャルドの理論』での政治的アヴァンギャルドと芸術的アヴァンギャルドのあいだでの険しい分岐が十九世紀末にかけて広がったとするレナート・ボッジョーリの立論に異論を提出している。カリネスクの議論については、『近代の五つの顔』中の「アヴァンギャルドの思想」、一〇〇～一〇六ページを見よ。
- 5) 唯美主義と社会的関与芸術のあいだの疎遠さがときにさまざまなアヴァンギャルド論争を形成さえもしている点を否定するわけではないが、ビデラは、二派（一方はより唯美主義的でヨーロッパ型であり、他方はより土着主義的で関与型）に鋭く分かれたラテンアメリカのアヴァンギャルドというアンヘル・ラマ Ángel Rama の理論に強く反対し、「アメリカの作家やテキストの現実のありようにおいては、そうした二分法はめったに対立をしない」(1: 26) と主張している。二種類のアヴァンギャルドというラマの概念については、『ラテンアメリカの小説：一九二〇～一九八〇年の概観 *La novela en América Latina: Panoramas 1920-1980*』の九九～二〇二ページを見よ。
- 6) たとえば以下を参照のこと。Randal Johnson, “The Institutionalization of Brazilian Modernism”。
- 7) 同じ方向性で重要ではあるがそれほど包括的ではない他の論考には、ノエ・ジトリック Noé Jitrik の「労働証明書：ラテンアメリカ・アヴァンギャルドについてのノート “Papeles de Trabajo: Notas sobre vanguardismo latinoamericano”」(一九八二年) およびフリオ・オルテガの「アヴァンギャルドのエクリチュール “La escritura de la vanguardia”」(一九七九年) がある。関連する方向で、ギド・ポDESTA Guido Podestá は、ラテンアメリカにおける近代性の経験に対するヨーロッパ・アヴァンギャルドの同時代的なさまざまな理論が適切かどうかを問うために、その論文「アヴァンギャルドの理論に対する民族誌的非難：ラテンアメリカおよびハーレム・ルネッサンスにおける近代性とモダニズム “An Ethnographic Reproach to the Theory of the Avant-Garde: Modernity and Modernism in Latin America and the Harlem Renaissance”」において民族誌的アプローチを採用している。ユルキエヴィッチの一九八四年の著作『網の目をくぐって：文学アヴァンギャルドおよび他の同時生起物について *A través de la trama: Sobre vanguardias literarias y otras concomitancias*』は、第一次大戦後の歴史的アヴァンギャルドを超えて、年代的にいった本研究の射程外にある文書まで入れるにいたっている。同じことが、本書自体をかたちづ

- くっているものよりも年代的に広い定義によって成り立っている、フェルナンド・ブルゴス Fernando Burgos 編の論集『スペイン語圏アヴァンギャルド小説 *Prosa hispánica de vanguardia*』(一九八六年)にもいえる。
- 8) ラテンアメリカ・アヴァンギャルドのより詳細な国別の概観については、ヴェラーニの宣言アンソロジーの序文、シュヴァルツのアヴァンギャルド資料アンソロジーの各国別の章の序文、およびフォースター／ジャクソンによるアンソロジーにおける文献の種別にならべられた国別リストならびに各国別研究の序文を見よ。
  - 9) アルゼンチンのアヴァンギャルドについての近年のすぐれた研究には、クリストファー・タウン・リーランドの『最後の幸福な男たち：一九二二年世代、小説、そしてアルゼンチンのリアリティ *The Last Happy Men: The Generation of 1922, Fiction, and the Argentine Reality*』およびフランシーン・マシエッロの『言語とイデオロギー：アルゼンチンのアヴァンギャルド諸潮流』がある。
  - 10) アヴァンギャルド的側面を含めたブラジルのモデルニズモにかんする浩瀚な文献一覧を介した研究の支えとなる手引きについては、フォースターとジャクソンの『ラテンアメリカ文学におけるアヴァンギャルド』のブラジルの章に付された紹介のコメントを見よ。
  - 11) チリのアヴァンギャルドにかんしては、クラウス・ミュラー＝ベルクの論文「アグー宣言および『マンドラゴラ』風アナーキーについて：チリにおけるアヴァンギャルドの生成、進展、絶頂のためのノート “De Agú y anarquía a la Mandrágora: Notas para la genesis, la evolución y el apogee de la vanguardia en Chile”」を参照。
  - 12) キューバの知的・政治的状况において『進歩評論』が果たした役割をみつかったこの雑誌にかんする最新の研究は、フランシーン・マシエッロの秀逸な論考「新植民地主義的美学再考：キューバの『進歩評論』における文学・政治・知的共同体 “Rethinking Neocolonial Esthetics: Literature, Politics, and Intellectual Community in Cuba’s *Revista de Avance*”」である。
  - 13) キューバのアヴァンギャルド総体の研究については、クラウス・ミュラー＝ベルクの「アンティール諸島におけるアヴァンギャルドの探究：キューバ、プエルトリコ、サント・ドミンゴ、ハイチ “Indagación del vanguardismo en las Antillas: Cuba, Puerto Rico, Santo Domingo, Haiti”」および早い時期にカルロス・リポリ Carlos Ripolli がおこなった研究の成果である『キューバにおける二三年世代およびアヴァンギャルドにかんするいくつかの論点 *La generación del 23 en Cuba y otros apuntes sobre el vanguardismo*』(一九六八年)を見よ。ラブラドル・ルイスは彼がアヴァンギャルド作家であったことを否認しているが (Fernández, “Conversation”), その時代の彼の小説は他のラテンアメリカ・アヴァンギャルド散文小説とさまざまな特徴を共有している。
  - 14) エストリデンティスタたちと「同時代人」グループについての網羅的な研究については、ルイス・マリオ・シュナイダー Luis Mario Schneider の『エストリデンティスモ、あるいは戦略の文学 *El estridentismo, o, Una literatura de estrategia*』、マーリン・フォースターの早い時期の研究書『「同時代人」たち、一九二〇～一九三二年：メキシコ・アヴァンギャルドの一実験のプロフィール *Los Contemporáneos, 1920-1932: Perfil de un experiment vanguardista mexicano*』、そしてギジェルモ・シェリダン Guillermo Sheridan の『つい昨日の「同時代人」たち *Los Contemporáneos ayer*』を参照。
  - 15) ペルーのアヴァンギャルドにかんしては、ルイス・モンギオーの画期的な研究書『ペルーのモデルニズモ以降の詩 *La poesía postmodernista peruana*』、より近年のものではミルコ・ラウレル Mirko Laurer の論文「ペルーにおけるアヴァンギャルド詩 “La poesía vanguardista en el Perú”」および文学の美学と文化ナショナリズムにかんする私の博士論文を見よ。
  - 16) 芸術の新潮流をめぐるエクアドルでの論争の記録した第一次資料のきわめて有用な集成については、ロブレスの『エクアドルにおけるアヴァンギャルドをめぐる観念 *La noción de vanguardia en el Ecuador*』を見よ。同書はまた、エクアドルでのアヴァンギャルド史のもっとも完全な研究成果である。同じくエクアドルにおけるインディヘニスモに対してアヴァンギャルドが有した関係性についての洞察に富む見解は、レジーナ・ハリソン・マクドナルド Regina Harrison Macdonald の博士論文「アンデス先住民族の表現：エクアドルにおけるイスパノアメリカとキチュアの詩の原典に即した文化的研究 “Andean Indigenous Expression: A Textual and Cultural Study of Hispanic-American and Quichua Poetry in



- Ecuador”」を参照のこと。
- 17) ニカラグアのアヴァンギャルドについては、ホルヘ・アレジャーノ Jorge Arellano の「ニカラグアのアヴァンギャルド運動、一九二七～一九三二年 “El movimiento de vanguardia de Nicaragua, 1927-1932”」および『伝統と近代の挟間で：アヴァンギャルドのニカラグア的運動 *Entre la tradición y la modernidad: El movimiento nicaragüense de vanguardia*』を見よ。
  - 18) プエルト・リコでのアヴァンギャルド活動の年代を確定するためのもっとも包括的な研究については、ルイス・エルナンデス・アキノの『われらが文学的冒険：プエルト・リコの詩における諸イズム、一九一三～一九四八年 *Nuestra aventura literaria: Los ismos en la poesía puertorriqueña, 1913-1948*』を見よ。
  - 19) ビデラの論文「モンテビデオの雑誌『ペン』（一九二七～一九三一年）を介した見たイベロアメリカにおけるアヴァンギャルド詩 “Poesía de vanguardia en Iberoamérica através de la revista *La Pluma*, de Montevideo (1927-1931)”」を参照。
  - 20) ベネズエラのアヴァンギャルドをめぐる包括的観点については、ネルソン・オソリオの『ベネズエラにおける文学アヴァンギャルドの形成（その経緯と記録） *La formación de la vanguardia literaria en Venezuela (Antecedentes y documentos)*』を見よ。
  - 21) フランシオン・マシエッロの論考「一九二〇年代ラテンアメリカ文学における女性・国家・家族 “Women, State, and Family in Latin American Literature of the 1920's”」を見よ。マシエッロは、「<sup>マスキュリン</sup>男性的なアヴァンギャルドのプログラム」そして／あるいはデ＝ラ＝パラ（とくに『イフィゲネイア *Ifigenia*』）、ノラー・ランゲ、およびマリア・ルイサ・ボンバルの作品における新世界主義 *mundonovismo* の国民主義的プログラムの数々に対する反論を支持している。私も同様に、『ママ・ブランカの思い出』においてデ＝ラ＝パラはアヴァンギャルドの言説そのものがもっている固有な諸戦略を<sup>アプロプリエイト</sup>流用し<sup>アプロプリエイト</sup>改変していると主張しておきたい。
  - 22) フランシオン・マシエッロはアヴァンギャルドに対して女性たちが取り結んだ関係性についての草分け的研究に「テキスト・法・境界侵犯：アヴァンギャルド（フェミニスト）小説をめぐる思索 “Texto, ley, transgression: Especulación sobre la novela (feminista) de vanguardia”」および「一九二〇年代ラテンアメリカ文学における女性・国家・家族」で取り組んできている。

## 略語

- GMT: Gilberto Mendonça Teles, *Vanguardiaaaa européia e modernism brasileiro*, Petrópolis, Brasil, Vozes, 1976.
- HV: Hugo Verani, *Las vanguardias literarias en Hispanoamérica: Manifiestos, proclamas y otros escritos* (Roma, Edizioni Bulzoni, 1986).
- MPP: Nelson Osorio, *Manifiestos, proclamas y polémicas de la vanguardia leteraria hispanoamericana* (Caracas, Editorial Ayacucho, 1988).

## 参考文献

- Arellano, Jorge, “El movimiento de vanguardia de Nicaragua, 1927-1932”, en *Revista Conservadora de l Pensamiento Centroamericano* 22 (106), Julio 1969,1-76.
- , *Entre la tradición y la modernidad: El movimiento nicaragüense de vanguardia*, San José, Costa Rica, Libro Libre, 1992.
- Burgos, Fernando (ed.), *Prosa hispánica de vanguardia*, Madrid, Orígenes, 1986.
- Carpentier, Alejo, “Cartel”, en *HV* 145-149.
- Casanovas, Martí [Martín Casanovas], “Arte nuevo”, en *ibid.* (ed.), *Revista de Avance*, 2ª edición, La Havana, Colección Orbita, 1972, 115-121.
- Forster, Merlin H., & Jackson, K. David, *Vanguardisms in Latin America: An Annotated Bibliographical Guide*, New York, Greenwood, 1990.
- Forster, Merlin H., *Los Contemporáneos, 1920-1932: Perfil de un experiment vanguardista mexicano*, México, D. F., Andrea, 1964.

- Halperin Donghi, Tulio, *Historia contemporánea de América Latina*, 4<sup>th</sup> ed. Madrid, Editorial Alianza, 1975.
- Harrison Macdonald, Regina, "Andean Indigenous Expression: A Textual and Cultural Study of Hispanic-American and Quichua Poetry in Ecuador", Ph. D. Dissertation at University of Illinois, 1979.
- Hernández Aquino, Luis, *Nuestra aventura literaria: Los ismos en la poesía puertorriqueña, 1913-1948*, 2<sup>a</sup> edición, San Juan, Ediciones de la Torre, University of Puerto Rico, 1966.
- Jitrik, Noé, "Papels de Trabajo: Notas sobre vanguardismo latinoamericano", en
- Johnson, Radal, "The Institutionalization of Brazilian Modernism" in *Brasil/Brazil* 3 (4), 1990, 5-23.
- Laurer, Mirko, "La poesía vanguardista en el Perú", en *Revista de Crítica Literaria latinoamericana* 8 (15), septiembre 1982, 77-86.
- Leland, Christopher Towne, *The Last Happy Men: The Generation of 1922, Fiction, and the Argentine Reality*, Syracuse, Syracuse University Press, 1988.
- Maples Arce, Manuel, *Actual —No.1 — Hoja de Vanguardia*, in *HV*, 71-78.
- Mariátegui, José Carlos, *Obras completas*, Lima, Amauta, 1980-1983.
- Masiello, Francine, *Lenguaje e ideología: Las escuelas argentinas de vanguardia*, Buenos Aires, Librería Hachette, 1986.
- , "Texto, ley, transgression: Especulación sobre la novela (feminista) de vanguardia", en *Revista Iberoamericana* 51 (132-133), July-December 1985, 807-822.
- , "Women, State, and Family in Latin American Literature of the 1920's", in *Women, Culture, and Politics in Latin America*, Berkeley, University of California Press, 1990, 27-47.
- , "Rethinking Neocolonial Aesthetics: Literature, Politics, and Intellectual Community in Cuba's *Revista de Avance*", in *Latin American Research Review* 28 (2), 1993, 3-31.
- Miller, Francesca, *Latin American Women and the Search for Social Justice*, Hannover, N.H., University Press of New England, 1990.
- Monguió, Luis, *La poesía postmodernista peruana*, Mexico D. F., Fondo de Cultura Económica, 1954.
- Müller-Bergh, Klaus, "Indagación del vanguardismo en las Antillas: Cuba, Puerto Rico, Santo Domingo, Haiti", en Fernando Burgos (ed.), *Prosa hispánica de vanguardia*, Madrid, Orígenes, 1986, 55-76.
- , "De Agú y anarquía a la Mandrágora: Notas para la genesis, la evolución y el apogee de la vanguardia en Chile", en *Revista Chilena de Literatura* 31, Abril 1988, 33-61.
- , "El hombre y la técnica: Contribución al conocimiento de corrientes vanguardistas hispanoamericanas", en Vol. 4 de *Philologica Hispaniensia in Honorem Manuel Alver*, Madrid, Gredos, 1983, 279-302.
- Ortega, Julio, "La escritura de la vanguardia", en *Revista Iberoamericana*, 45 (106-107), January-June 1979, 187-198.
- Osorio T., Nelson, *La formación de la vanguardia literaria en Venezuela (Antecedentes y documentos)*, Caracas, Academia Nacional de la Historia, 1985.
- Pérez Firmat, Gustavo, *Idle Fictions: The Hispanic Vanguard Novel, 1926-1934*, Durham, Duke University Press, 1982.
- Perloff, Marjorie, *The Futurist Moment: Avant-Garde, Avant Guerre, and the Language of Rupture*, Chicago, The University of Chicago Press, 1986.
- Podestá, Guido A., "An Ethnographic Reproach to the Theory of the Avant-Garde: Modernity and Modernism in Latin America and the Harlem Renaissance", in *Modern Language Notes* 106 (2) , March 1991, 395-422.
- Rama, Ángel, *La novela en América Latina: Panoramas 1920-1980*, Xalapa, Mex. Universidad Veracruzana, 1986.
- Ripolli, Carlos, *La generación del 23 en Cuba y otros apuntes sobre el vanguardismo*, New York, Las

- Américas, 1968.
- Rivera Chevrement, Evaristo, "Trazos", *Vórtice* 1 (1), Abril 1927, 1-2.
- Robles, Humberto, *La noción de vanguardia en el Ecuador: Recepción- Trayectoria- Documentos (1918-1934)*, Guayaquil, Ecuador, Casa de la Cultura Ecuatoriana, 1989.
- Schneider, Luis Mario, *El estridentismo, o, Una literatura de estrategia*, México, D.F., Bellas Artes, 1970.
- Schwartz, Jorge, *Las vanguardias latinoamericanas: Textos programáticos y críticos*, Madrid, Cátedra, 1991.
- Sheridan, Guillermo, *Los Contemporáneos ayer*, Mexico D. F., Fondo de Cultura Económica, 1985.
- Skidmore, Thomas E., & Smith, Peter H., *Modern Latin America*, 2<sup>nd</sup> ed., New York, Oxford University Press, 1989.
- Torres Bodet, Jaime, *Contemporáneos: Notas de crítica*, Ciudad de México, Herrero, 1928.
- Videla de Rivero, Gloria, "Poesía de vanguardia en Iberoamérica através de la revista *La Pluma*, de Montevideo (1927-1931)", en *Revista Iberoamericana* 48 (118-119), January-June 1982, 331-349.
- Videla de Rivero, Gloria, Tomo 2 de *Direcciones del vanguardismo hispanoamericano*. [Documentos], Mendoza, Argentina, Universidad Nacional de Cuyo, Facultad de Filosofía y Letras, 1990.
- Yurkievich, Saúl, *A través de la trama: Sobre vanguardias literarias y otras concomitancias*, Barcelona, Editorial Muchnik, 1984.
- , "Los avatares de la vanguardia", en *Revista Iberoamericana*, 48 (118-119), January-June 1982, 351-366.

## 邦訳文献

- オルテガ・イ・ガセット、ホセ、神吉敬三訳「芸術の非人間化」、『オルテガ著作集3』、白水社、35-91。
- カリネスク、マテイ、富山・梅訳『モダンの五つの顔』、せりか書房、一九八九年 (Calinescu, Matei, *Five Faces of Modernity: Modernism, Avant-Garde, Decadence, Kitsch, Postmodernism*, Durham, Duke University Press, 1987.)
- ビュルガー、ペーター、浅井訳『アヴァンギャルドの理論』、ありな書房、一九八七年
- ボッジョーリ、レナート、篠田訳『アヴァンギャルドの理論』、晶文社、一九八八年

## 解題

この翻訳は、一九九四年にカリフォルニア大学出版局から刊行された、ヴィッキー・ウンルーの著書『ラテンアメリカのアヴァンギャルド——波乱にみちた出会いの芸術』(Unruh, Vicky, *Latin American Vanguardists: The Art of Contentious Encounters*, Berkeley & Los Angeles, University of California Press, 1994) の序文の前半である。

ウンルー(本名は Katherine Vickers Unruh)は、1920年代ペルーのアヴァンギャルド研究をもととした博士論文「ペルーのアヴァンギャルド——文芸美学と文化ナショナリズム」(一九八四年)によってテキサス大学オースティン校で学位を取得し、現在、カンザス大学教養学部スペイン語・ポルトガル語科教授をつとめている。

ウンルーの同書は、大陸とカリブ地域をむすび、スペイン語圏・ポルトガル語圏を軸に他の言語圏におよぶ広範な地域をカバーしている。そして、ラテンアメリカにおける一九二〇年代から三〇年代にかけての広義のアヴァンギャルド表現運動を、精緻なまなざしをもって概観し、その中心的なテーマとされた特質を論じた大変な労作であり、現在すでに世界のアヴァンギャルド研究にとどまらず比較文学の分野での古典となっている。ここで「広義の」というのは、ブラジルにおいてはアヴァンギャルドとして登場したのが「モデルニズモ」と呼ばれた潮流だったからである。

ウンルーの著書が上梓されるまでは、ラテンアメリカのアヴァンギャルドをヨーロッパからの移殖物あるいは派生物としてとらえる観点が支配的であった。だが、ウンルーは、ラテンアメリカ／カリブ諸国・諸地域のさまざまなアヴァンギャルド表現を精査し、それらの生み出したかすかすの宣言や作品がラテンアメリカ固有の歴史的・社会的・文化的文脈に由来するものであることを明らかにした。

ウンルーの分析については、①エクリチュールと音声とに分析対象を絞っており、絵画や写真あるいは音楽といった隣接分野との架橋のもとで、ラテンアメリカにおけるアヴァンギャルド運動が展開したことへの注視があまりない点、②ラテンアメリカの固有な文脈（とくに歴史的なそれ）を強調するあまり、アヴァンギャルドが有するトランスアトランティックな連関や世界的な同時性の観点が後景に退いてしまった点などにおいて問題なしとはしない。だがそれは、本書が果たした、アヴァンギャルド研究において決定的な転回をもたらしたという役割にとっては瑕疵とはいえないものである。

同書の与えた大きな影響のもとで、クラウス・ミュラー＝ベルクとジルベルト・メンドンサ＝テレスの編になる、これまでになく充実した全6巻予定のラテンアメリカ・アヴァンギャルド資料集が、1975年ドイツはフランクフルトで創立され1996年以降マドリッドにおいても精力的な出版事業に取り組んでいるフェアフェルト／イベロアメリカーナ出版から刊行途中である。

なお、煩雑ではあるが、二〇世紀ラテンアメリカ文学や文化にかんして十分な紹介がなされてきたとは言えない日本においては、おそらくなじみのないだろう人名や作品名が頻繁に文中に登場する。それらの固有名詞には初出時に原綴をつけたほか、できるかぎり元の発音に近いカタカナ表記を心掛けたことを付記しておく。

原著では最後に章別構成の要約が述べられているが、この訳稿の内容に直接に関係するものではないので省略した。ご了承いただきたい。

(本学学際プログラム教授)

